

## 陸中・山田湾文化の8世紀土師器に学ぶ（第2報）

### —人類活動の順序と地域間の連絡・交渉から観た「山田湾式」の出現—

鈴木正博

#### 序—縄紋式／弥生式における「山田湾文化」の位相から—

先史における東国世界と北方世界の交流実態や社会変動を人類史として明らかにする「列島境界形成史」を学ぶ者にとり、陸中・山田湾文化（以下、「山田湾文化」と略）は垂涎の研究領域の1つである。東北北半に位置する地勢から単純に寒い気候の類似した生活様式を想像するが、現地のフィールド調査を行えば、即座に暖流の影響が強い生態系の文化圏に属すことを経験する。積雪の多い日本海側の自然環境とは馴染みが薄い生活様式に従い、基本的には文化系統も経済や婚姻による交流関係も異なる独自の生活圏を形成する。沿岸文化として共通性を想像するならば、三八・上北方面との違いも甚だしく、やや乱暴に概観すれば、南奥文化の北端という印象すら覚える。

3・11東日本大震災以来、岩手県下閉伊郡山田町を訪れ歴史に親しむ山田史談会との交流会に参加する中で、現代社会の月並みな生活様式が普及しても、極めて個性的な地域社会の一端に触れることができ、そして被災の渦中にも拘わらず誇り高き生き様に接することになったが、そこに「山田湾文化」の素晴らしさを学ぶ意義と喜びが浮上し、来るべき復興への途は間違いなく歴史の中にある、と信じることができた。有り体に言えば、時代語りや物語による月並みな斉一化ではなく、個性に接近する方法そのものを導出するのが「山田湾文化」研究の醍醐味であろうし、新たな個性の発見は将来に向けて豊かな導きと喜びをもたらすであろう。

具体的な一端に触れる。山田史談会との交流の中から地域の特性として「防災・減災考古学」の構想が自ずと生まれ、未明である先史から古代にかけての山田湾の人類史について勉強を始めた。縄紋式では岩手県でも大洞貝塚より北部に位置する地域にも拘らず温暖な気候の植生とともに縄紋式は「大木式」の文化圏であることに驚き（鈴木正博 2013a・b・2014b）、次いで弥生式前期には「北奥遠賀川式」を伴存しない非「砂沢式」現象が明らかとなった（齋藤瑞穂 2013）。そして極めつけは弥生式後期「赤穴式」（齋藤瑞穂 2007）に一般的な「赤穴系列斜回転作法」（鈴木正博 2014d）と呼ぶ縄紋施文法にあり、北奥や北海道に独特の存在を示す「日本海系列羽状作法」（鈴木正博 2014d）の検出を稀有とする現象（齋藤瑞穂 2014）にとどまらず、特に山田町山ノ内Ⅱ遺蹟（佐々木清文ほか 1996）の縄紋壺図面を知るに至っては、少なからず自身の先入観を捨て去る必要に迫られた。誇り高き山田湾の人々の、その先住民の生き様に地域の個性を見抜く視点がこれまでの考古学に欠けていたことを素直に反省したいと思う。

第1図は宮城県から北海道南部において弥生式後期後葉「十王台式」からその直後の「続十王台式」の時期に並行する土器群である（鈴木正博 2014d）。年代的にはやや幅を有する土器群であり、それぞれの地域の代表的な縄紋施文作法を理解するために模式化抽出したが、齋藤瑞穂の分析例（齋藤瑞穂 2011）を参考に年代的な作法の変遷を重視するならば、施文作法の系統別にはより近似した緩衝的傾向が強くなるような変更が生ずるかもしれない。北方に「交互刺突文」が定着する現象が顕著であっても、既に南奥では年代的特徴として「交互刺突文消失現象」が顕現し、それを踏まえて南奥から北方まで同期する動向を概観するための資料選定である。

第1図で注目すべきは北海道キウス7遺蹟の深鉢大小2個体である。共に口縁部を青森県九艘泊

洞穴や秋田県寒川Ⅱ遺蹟2号土壙出土壺にみられる「日本海系列羽状作法」とし、体部には「赤穴系列斜回転作法」を配する構成は正に両系列が1個体上でクロスした現象を示す。この現象の主体は「赤穴式」の文様帯にあり、東北地方における「赤穴系列斜回転作法」の代表的な特徴として、口縁部文様帯には体部の縄紋施文作法とは性質を異にする文様や縄紋を配する現象がみられる。

北海道桜町遺蹟例ではキウス7同様の「日本海系列羽状作法」に従う5以外に2・3が別種の「縄紋原体押圧帯作法」であり、岩手県湯舟沢遺蹟段帯口縁の帯作法と共通しており、より「赤穴式」に傾斜する。更に「縄紋段帯口縁作法」の4にも注目するならば、北海道における縄紋施文を主体とする土器群（除く「交互刺突文」を特徴とする土器群）の概観は、

【縄紋装飾系列1種】：「縄紋段帯口縁作法」の仲間

【縄紋装飾系列2種】：「日本海系列羽状作法」の仲間

【縄紋装飾系列3種】：「縄紋原体押圧帯作法」の仲間

という3種の縄紋装飾系列作法が主要な核となり、それらが相互に縄紋原体の系統と関わりあいながら展開し、しかもその文様帯は岩手県に分布の中心を置く「赤穴式」と共通していることが容易に分かる。

では、該期の「山田湾文化」の動向はどうであろうか。山田町の弥生式集成(齋藤瑞穂2014)によれば、弥生式後期は「赤穴式」が多く、その中でも「赤穴式」とは異なる山ノ内Ⅱ遺蹟の「縄紋段帯口縁作法」に注目したい。注目点は単節縄紋段帯部の上下端に限り縄紋原体押圧文が見られる作法で、その直下に配した湯舟沢遺蹟例では段帯口縁全体に「縄紋原体押圧帯作法」として充填する特徴が観られることから、明らかに縄紋原体も含めて「赤穴式」とは異なる作法である。山ノ内Ⅱ遺蹟の単節縄紋による類似の作法は、例えば山形県菖蒲江1遺蹟などに知られることから宮城県を含めた南奥方面と関係し、年代については第1図の「石田Ⅱ式」と比較するならば、「石田Ⅱ式」が段帯部の文様帯がより「十王台式」と近しく「赤穴系列斜回転作法」に従うことから、「石田Ⅱ式」よりは古式に位置付けられる。

第1図の宮城県資料で追認するならば、北海道桜町遺蹟の「縄紋段帯口縁作法」と形態も含めて類似する青木遺蹟例も縄紋原体は単節縄紋である。口縁段帯部を文様帯とする「石田Ⅱ式」と類似する資料は崎山囿洞穴例であり、「縄紋段帯口縁作法」と「縄紋原体押圧作法」が融合した文様帯となる。湯舟沢遺蹟例同様に山ノ内Ⅱ遺蹟例から充填度が発達する方向で変遷する系列であろうか。五松山洞穴例も「縄紋段帯口縁作法」で、縄紋原体の末端を装飾的に施文する例である。「日本海系列羽状作法」とは異なる「続十王台式」期「堀越式」(鈴木正博2014d)に属する羽状縄紋壺が宇南遺蹟例である。

畢竟、宮城県における縄紋施文を主体とする土器群（除く「交互刺突文」を特徴とする土器群）は、北海道における3種と異なるものの、施文構造的には対比でき、「十王台式」系譜の羽状縄紋、「縄紋段帯口縁作法」と「縄紋原体押圧作法」の融合、そして単節縄紋による「縄紋段帯口縁作法」の3種に先ず注目したい。特に「日本海系列羽状作法」の母体を考える場合、宇南遺蹟例に見る「堀越式」の動向が有力な候補であることは否定しえない。

そこで改めて「山田湾文化」の山ノ内Ⅱ遺蹟例の形成背景を考察するならば、「赤穴式」が「交互刺突文」を「型式組成」に組み込むことから、福島県中通りの「天王山式」に続く「明戸式」(鈴木正博2002)と同期・連動する宮城県の未命名「土器型式」の系統が由来となるであろう。

このように弥生式後期後葉まで南奥系土器群と密接な関係を有する生活の痕跡が確認される「山田湾文化」は、大和政権による古墳時代には無人と化したかのように長期の継続的な活動の痕跡は未明であり、今後の調査が期待される。

しかし、時を経て新たな生産の地として山田湾に長期的に入植する人々で賑わいを見せるのが古

代蝦夷の時代である。古代の「山田湾文化」を形成した初期入植者の集落構成は、現時点では沢田 I 遺蹟の「山田湾 1 式」が有力であるが、集落構成を不問に付すならば、遺構外出土の土師器にも示唆に富む古式の資料がある。

本稿では山田湾において沢田 I 遺蹟住居址出土土師器より古式の形態が存在すること、そしてそれらの土器群が内包する年代的系統的諸課題に問題の所在を置き、その集団の系統について議論するとともに、「山田湾式」と関係する周辺地域における土師器の変遷を比較し、「山田湾式」出現の位相を導出したい。

## 1. 問題の所在—前稿をふりかえることで新たに見えてきた視点—

茨城県水戸市南台遺跡で採集した古代土器の紹介はそれまでの土師器研究における斉一性という定説に根本から疑義を呈し、東部弥生式と同様に先史土器の個性的な分布が古代土師器においてもみられる現象を明らかにした（鈴木正博 1976）が、当時の資料的制約から「土器型式」としての「細別」や年代の特定については概観にとどまり、地方別の深い議論は今後の課題とした。

「山田湾文化」としての古代土師器の編年を構築するに当たり、そうした反省点を踏まえて竪穴住居址（以下、住居址と略）出土土師器については層位と型式学の適用から順序付けを行う「住居址シークス」の導出、並びに古代墳墓出土土師器を対象とした「墳墓シークス」の導出により、両者の交差検証を経た上で、「山田湾式」という「土器型式」の制定と「山田湾 1 式」～「山田湾 7 式」までの「細別」を進め、それらの暦年代は 8 世紀を中心として考察し、大凡 7 世紀末から 9 世紀初頭までに比定したのが前稿（鈴木正博 2014a）である。

「山田湾式」の 8 世紀という暦年代比定については新し過ぎるとの意見も何人かの研究者から頂戴したが、東京都多摩市上っ原遺蹟では東北系の住居址である 1 号住居址と 2 号住居址において、「9 世紀第 3 四半期から第 4 四半期段階」の須恵器杯と岩手県南部の北上川中流域編年では 9 世紀前葉とされる土師器が伴存し、東京都と岩手県との編年の暦年代比定において約 50 年もの年代的齟齬が顕現した（平野修 2013）折でもあり、定説に拘る理由は見出せないこと、及び「土師器の生産センターは存在せず、各遺跡で手軽に土師器を作った可能性があることが分かる。」（三辻利一 2007）との土師器の製作環境に先史土器と共通する現象が措定されることから、本稿も基本的に前稿を踏襲する。

また、前稿では 1 例ではあるが墳墓出土土師器において小片の杯に惑わされ、より特徴が明確な甕の存在を見落とした所業が見られたので早速、「R T 0 7 墳墓主体部出土蕨手刀の年代（黒濟和彦の教示）と周湟出土の土師器小片の編年的位置（中略）の齟齬を見直した所、杯の口縁部に古い様相を留めることから「房の沢 2 期」に編年した経緯は修正が必要になった。体部が不明の坏小片での判断であり、該論文では触れることのない甕の口頸部片に着目すると明確な「有頸無文甕」と判断できる属性を見逃しており、本稿にて R T 0 7 墳墓周湟出土土師器の坏と甕の編年的位置は属性が明らかな「有頸無文甕」を根拠として見直したい。そこで「分類の標本」と突き合わせるならば、「房の沢 3 期」の R T 2 9 よりも「房の沢 4 期」の R T 1 4 に近似しているものの、土師器片は口縁部あるいは後頸部のみの小片でもあり、「房の沢 3 期」～「房の沢 4 期」と幅を持たせておくのが無難であろう。小片とは言え見直しを進めた所、R T 0 7 主体部出土蕨手刀黒濟編年と周湟出土土師器の「山田湾編年」による年代観は齟齬の解消に向けて検討が一步進んだのである。」（鈴木正博 2014c）と清算したが、その改訂を反映した議論の展開が今後の課題となる（五十嵐聡江 2014）。

更に房の沢 IV 遺蹟の資料を見直すならば、遺構外土師器を扱わない制約から生じた不具合には「山田湾式」出現の型式学的にとって極めて重要な資料が見出せ、議論を尽くすべきと考えた。

見直しの第一は古代蝦夷の山田湾への入植時期であり、遺構外土師器に「山田湾 1 式」より确实

に古くなる土器群を発見したこと（鈴木正博 2014b）である。第二は導出したシケンス連続性には8世紀という年代幅の制約を前提としたため、その制約からはみ出た古い年代の他地域土師器にも拘わらず、希少な特徴ゆえに類似の文様への注目を優先し、結果として年代差を地方差と見誤る思考に至ったこと（鈴木正博 2014b）である。この2点の見直しは本稿において問題の所在とすべき価値ある型式学と考えるに至り、遭遇直後には早速見直すべき資料の公表を済ませた経緯がある。

そこで次節において具体的な課題を明らかにし、以降においては「山田湾式」制定の型式学について遠野方面を経て北上川上・中流域に適用し、そして遂には馬淵川下流域へと展開したいと思う。

## 2. 7世紀後葉の山田湾に出現した「プロト山田湾式」から導出される5つの課題

では、改めて深耕すべき土師器とはどのような形態・装飾故に型式学的に再吟味が必要となるのか、古代の「山田湾文化」形成について深耕する鍵的な役割であることを明らかにしたい。

### 1) 「プロト山田湾式」の追及—遺構外出土の「山田湾式」以前の土師器から—

古代の山田湾に入植した集団の来歴は、前稿では沢田 I 遺蹟（佐々木清文・千葉正彦 2000、星雅之 2000）の集落と房の沢 IV 遺蹟（大道篤史・佐藤良和・星雅之・佐々木清文 1998）の墳墓群の分析によりハケメ作法の坏と甕が特徴的に纏まることから、大槌街道などを経由した南向き内陸方面と考察した。

そこで地形面でも人類活動面でも9世紀以降の攪乱が少ない房の沢 IV 遺蹟をふりかえり、新たに遺構外出土土師器を検討対象とするならば、第2図上段の土器群が注目されるべきで、それらは残念ながら層位的な一括性の保証は得られないものの、「山田湾式」以前と型式学的に考察される特徴ある形態である。

268は型式学的に「山田湾1式」の直前に位置付けられる坏である。外形が独特の弧線を描き、内面にも段を有する「逆三角形有段丸底坏」よりは確実に退化・変化しているが、「山田湾1式」よりは「逆三角形有段丸底坏」に近く、底部外面にケズリ作法以外にハケメ作法も見られる点は「山田湾1式」への傾斜を示す。この存在を以て【「逆三角形有段丸底坏」出現課題】と呼ぶ。

267は明瞭な段を有する有段丸底坏の伝統を遺しつつ底辺を縮小させて極めて扁平な形態を作出する独特の作法による「底辺縮小有段丸底扁平坏」である。しかも「山田湾式」とは伴存しない現象が一般的であることから、「山田湾1式」より確実に古式の作法である。これを【「底辺縮小有段丸底扁平坏」出現課題】と呼ぶならば、岩手県中部（八木光則 2007）を中心に共通の現象が定着し、岩手県南部（高橋千晶 2007）では類似の形態が顕著でないことから、年代と系統の特定に寄与する形態である。267は法量的にも坏の範疇であるが、次に述べる269の影響如何も気になる所である。

269は平底の盤であるが盤には小型で、「山田湾式」には伴存しないことから、【小型盤出現課題】と呼び、「山田湾1式」の直前と考察する。南向きの宮城県北部・沿岸部には小型の盤が定着し（佐藤敏幸 2007）、また岩手県中南部における非定着様相からは遠野方面との関係が示唆される。

275は小型甕で、やはり「山田湾式」には伴存しない注目すべき長頸形態である。小型ではないが、類似の長頸形態としては八戸方面で「前一段階」（宇部則保 2007a）とされる「長頸長胴甕」が挙げられ、円形刺突文を除けばミガキ作法も系統的な関係を示す。「山田湾文化」における275の出現を【長頸長胴甕出現課題】と呼び、「前一段階」からどのような変遷を辿り、遂には北上川上・中流域から遠野方面へと影響し、「山田湾1式」直前に入植した可能性を検討したい。

277は強く外反する頸部に単純な鋸歯文を施文する小型甕である。沢田 I 遺蹟や房の沢 IV 遺蹟の「山田湾3式」に観られる「有頸有文甕」は、段や沈線で横帯区画を施し、その内部に複合鋸歯文を

充填する作法に従うことから、277 の存在を【口頸部単純鋸歯文小型甕出現課題】と呼ぶ。277 は「山田湾3式」の「有頸有文甕」とは明らかに異なる装飾と形態である。しかも胴部はハケメ作法に従っており、「山田湾3式」の本質がミガキ作法であることから型式学的な隔たりが指摘される。他の杯や甕と同様に「山田湾1式」直前の年代を与えるのが妥当であろう。そのためにも【口頸部単純鋸歯文小型甕出現課題】は型式学の重要なテーマとなる。

以上、房の沢IV遺蹟の新たに検討した遺構外出土土師器の中から、「山田湾式」以前と思われる坏、盤、甕を抽出しその特徴について触れ、

課題1：【「逆三角形有段丸底坏」出現課題】

課題2：【「底辺縮小有段丸底扁平坏」出現課題】

課題3：【小型盤出現課題】

課題4：【長頸長胴甕出現課題】

課題5：【口頸部単純鋸歯文小型甕出現課題】

の5つの課題を提示したが、残念ながらそれらは年代的系統的にも一括性に対する何らの保証もない。それでも広域に見渡した場合に7世紀後葉と類似する特徴でもあり、本稿では「プロト山田湾式」と広義にとらえた上で山田湾における古代最古の入植者痕跡と措定する。

そこで次には「プロト山田湾式」という年代的系統的認識に基づき、その由来に接近可能な一括性の高い土器群について検討しなければならない。

## 2) 遠野市晴山II遺蹟出土土師器の再吟味—「プロト山田湾式」形成背景を探る—

前稿では「山田湾3式」の由来として遠野市晴山II遺蹟の住居址出土土器群（岩手県教育委員会事務局文化課編1996）を紹介し、「山田湾3式」期の晴山II遺蹟では「鋸歯文系列」に価値を認める現象が顕著であり、杯の形態ばかりでなく、甕にも山田湾文化と遠野方面との違いを窺てとる必要がある。（鈴木正博2014a）と、「山田湾文化と遠野方面との違い」を強調し、その違いを地方差と考えた。しかし、今回の「プロト山田湾式」導出に至り、晴山II遺蹟との比較対象は「山田湾3式」ではなく、「プロト山田湾式」とすべきで、より整合的かつ親和的な型式学の展開が図れるとの見通しを得た。

第2図下段は前稿でも引用した晴山II遺蹟の中でも特徴ある土器群で、「プロト山田湾式」との類似を特定器種に偏ることなく示すためにも住居址出土土器群から抜粋した。杯や甕とは別器種として先ず問題にすべきであったのは、「山田湾1～3式」には伴存しない形態で、しかも南北両系統の交流を誇張するような小型盤(35)と「有段丸底椀」(27)の顕在である。

【小型盤出現課題】である小型盤(35)は「プロト山田湾式」の南向きからの系統的由来を明示する。また、【「逆三角形有段丸底坏」出現課題】と密接な関係にある「有段丸底椀」(27)は、八戸方面との関係に雄弁で、北向き系譜である「逆三角形有段丸底坏」や「長頸長胴甕」と同期した動きが考察される。

有段丸底坏にも触れておきたい。ミガキ作法であるため、「山田湾1・2式」のハケメ作法とは調整系統を異にするが、36の形態は「プロト山田湾式」の268と類似し、底辺が扁平な29は同様に「プロト山田湾式」の267出現現象と対応すると考察する。とすれば、【「底辺縮小有段丸底扁平坏」出現課題】も晴山II遺蹟と無縁ではない。

このように晴山II遺蹟に見られる坏・椀・小型盤などの種類を「山田湾式」と比較するならば、「日常什器揃え」において「離れ蝦夷」の山田湾における極めて質素な生活様式が遠野方面では殆ど見られず、更に形態などの多種多様な保有には系譜の混交という特徴もあり、その現象の背景には広範な移動を伴う集落事情、即ち、律令側の立場で「離れ蝦夷」と関係し、物産の中間管理（仕分け

地別送り状管理など)のような管理機能を果たした可能性が彷彿とする。

次に問題とすべきは甕であり、【長頸長胴甕出現課題】への対応である。275の「長頸長胴甕」に類似する10・12、略同じ範疇でやや頸部の屈曲が激しい5・13・15があり、それらは「山田湾式」の甕に比して頸部が長い特徴がある。それにも拘らず過誤が生じた原因は、「有頸有文甕」18・21の有段部区画内「鋸歯文系列」の渉獵不備にあり、改めて「鋸歯文系列」を詳細に吟味したい。

第2図に示した「プロト山田湾式」の277、及び晴山II遺蹟の18・21は2条の沈線による単純な鋸歯文(277・21)となるか、単純な鋸歯文の三角部に重層するように「V」形あるいは「八」形を付加する構成となり、これらを「**単純鋸歯文系列**」と呼びたい。他方で「鋸歯文系列」の類例として挙げた房の沢IV遺蹟RT04古墳の有文甕は、単純鋸歯文は存在せず、「八」形の繰り返し空間に更に「八」形を充填する作法や「八」形の両側に斜線が充填される作法となる。鋸歯の単純な繰り返し位相をずらしたり、装飾化することを目的とした補助線により構成されることから、単純ではなく「**複合鋸歯文系列**」と命名したい。

ここにおいて「山田湾式」には「**複合鋸歯文系列**」が伴存し、「プロト山田湾式」には「**単純鋸歯文系列**」が伴存することから、

「**鋸歯文系列**」の変遷 : 「**単純鋸歯文系列**」 → 「**複合鋸歯文系列**」

との年代の変遷を考察するが、現時点では山田湾から遠野方面にかけての局所的な出来事に過ぎない。しかも【口頸部単純鋸歯文小型甕出現課題】への対応は晴山II遺蹟では適わず、それには南向き内陸の北上川中流域での学史的状況(高橋與右衛門1994)が今日的に検証されねばならない。

### 3. 北上川中流域の「住居址シケス」と「単純鋸歯文系列」の伴存

前稿では「鋸歯文系列」の型式学の不備が露呈し、併せて「山田湾3式」に出現した特徴的な「**格子目文系列**」の意義へも接近できず、結果的に「鋸歯文系列」にみる「山田湾3式」の「**複合鋸歯文系列**」が年代差とならなかった。こうした反省から晴山II遺蹟の再吟味が必須となり、次に行うべきは「山田湾式」より古式に位置付けられた「**単純鋸歯文系列**」の年代的位置の確認・検証である。

ところが有文甕に施文される「**単純鋸歯文系列**」の年代的位置を導出するには、年代の順序を示す標準となる土師器坯の「住居址シケス」による伴存関係が必須となる。

ここで学史的な岩手県旧水沢市膳性遺蹟(高橋與右衛門ほか1982)は、有文甕に限らず当該時期の集落も調査され、複数の住居址床直出土器群を比較し型式学的な推移を追う検討も行われ(高橋千晶2007)、北上川中流域でも南部に位置する地方差は考慮するとしても、「**単純鋸歯文系列**」の研究には欠くべからざる集落である。

では房の沢IV遺蹟の【口頸部単純鋸歯文小型甕出現課題】から膳性遺蹟に接近し、該期形態の出現から「住居址シケス」を構築し、「**単純鋸歯文系列**」がどのように継承されるか、出現から終末に至るまで交差検証を踏まえつつ、「山田湾式」以前の北上川中流域の動向を概観したい。

第3図は膳性遺蹟G-8住居址-2(以下、G8住2と略)床直出土器群である。【口頸部単純鋸歯文小型甕出現課題】への検証候補が498の小型甕である。口頸部の外反が強い形態は「プロト山田湾式」と類似し、498は長頸の形態と体部がハケメ作法にミガキ作法を加える調整にその年代の系統的特徴が窺える。共通性として強調したいのは498の単線単純鋸歯文の施文で、しかも施文帯は一周廻りとせず、半周に留める点である。277は対線単純鋸歯文であるが、施文域は一周廻りとせず部分的である。旧水沢市と山田湾に観られる小型甕に共通した特異な施文域現象は、単純な日常生活に必須な「日常什器揃え」というよりも、土師器に対する特定イデオロギーと深くかかわる施文形態として考察されることから、決して偶然ではなく、山田湾への人的移植の故地が彷彿とする。

第3図477～482は内外面に段や稜を有する有段丸底杯で、480に典型性をみるように【「逆三角形丸底杯」出現課題】と関係しつつも、趨勢は477～479の「底辺縮小化形態」が特徴的である。「底辺縮小化形態」は扁平化を見せないまでも【「底辺縮小有段丸底扁平杯」出現課題】と現象的には関係する可能性が高い。478・480～482から判断する限りは「山田湾1式」の口縁部が内傾化する作法とは異なり、年代的な接点は見当たらない。482に見られる底辺と「口縁部外反名残り形態」に注目するならば、晴山Ⅱ遺蹟では第2図28の椀にも共通に外反の名残りが指摘されるものの、有段丸底杯には「口縁部外反名残り形態」が存在しないことから、幾ばくかの年代的な隔たりが考察される。

第3図487・494・500はハケメ作法の大型長胴甕であり、晴山Ⅱ遺蹟のようにミガキ作法で長頸となる形態は見当たらないので、大型甕の系統は異なる。

第3図503・506はハケメ作法の甑である。「山田湾式」では甑の検出が稀であり、炊事に必要とされる土師器の「日常什器揃え」に異なる風習が指摘されるが、この差異は炊飯の有無に起因するであろう。

以上、膳性遺蹟G8住2床直出土土器群からは【口頸部単純鋸歯文小型甕出現課題】への接近が図られたものの、【「底辺縮小有段丸底扁平杯」出現課題】との関連については示唆に留まる。

しかしながら、膳性遺蹟からは他にもC-3住居址-1（C3住1と略）床直やC-6住居址-2A（C6住2Aと略）カマド、N-6住居址（N6住と略）床直で「単純鋸歯文系列」の出土が見られ、しかもG8住2床直出土土器群とは年代が異なる現象に注目したい。更に膳性遺蹟の住居址出土土器群は「単純鋸歯文系列」の伴存を契機として7世紀以降に変遷過程を追及するにはシケンスとして比較的良い纏まりが見られ、紙面の関係で有段丸底杯に限定した膳性遺蹟の「住居址シケンス」の概要を決定しておく。

始点は既に示したようにG8住2床直出土の【口頸部単純鋸歯文小型甕出現課題】とし、終点は「山田湾式」との年代的系統的関係を追及する目的から、F-6住居址（F6住と略）床直出土土器群とする。F6住床面出土の有段丸底杯は概ね「山田湾2式」と年代的に関係するからである。

そこで順次有段丸底杯の変遷を見て行こう。G8住2床直資料は「口縁部外反名残り形態」と「底辺縮小化形態」に特徴があり、この2形態がどのように変化するか注目すれば、第4図上段のC3住1床直出土土器群が射程に入る。有段丸底杯（65～69・71・72）にはG8住2床直出土で見られた「口縁部外反名残り形態」が失われ、「口縁部直線的な外傾形態」が一般的となり、中には66・71のように内弯化する直前の対応と思われる「口縁部内弯化形態」も出現し、併せて65～67には「底辺縮小化形態」が定着することもあり、膳性遺蹟における有段丸底杯には、

G8住2床直 → C3住1床直  
（「口縁部外反名残り形態」） （「口縁部直線的な外傾形態」・「口縁部内弯化形態」）

という型式学的変遷が導出される。と同時に【「底辺縮小有段丸底扁平杯」出現課題】を意識するならば、「底辺縮小化形態」の継承にも拘わらず、扁平杯の形成に至らない現象は系統性に委ねるべき問題の可能性が高く、その出現と「底辺縮小化形態」には強い相関を考えたいと思う。

また、このC3住1床直出土土器群には第4図上段100の「単純鋸歯文系列」甕が伴存する。大型の「有頸有文甕」であり、【口頸部単純鋸歯文小型甕出現課題】とは異なる系譜である。伴存する「長頸長胴甕」89は小型で、形態的には【長頸長胴甕出現課題】と類似するが、ハケメ作法である点が大きく異なる。「プロト山田湾式」の【口頸部単純鋸歯文小型甕出現課題】は「く」字形外反のきつい口縁部形態であり、より新しい甕と思われる。

C3住1床直に続く有段丸底杯の変遷として理論的には「口縁部内弯化形態」から「口縁部内弯形態」への変化が措定され、その典型として第5図上段のH-11住居址（H11住と略）床直・カマド出土土器群が該当する。605～608は全てミガキ作法で、全形が【「逆三角形有段丸底杯」出現



な変化が生じている。第一の変化は「底辺拡大化形態」で一目瞭然であろう。H 11 住床直の小型坏 603・604 が有段丸底坏の底辺模倣坏とするならば、393 も正しく F 11 住床直の底辺模倣坏と合致する。

第二の変化は 392・394・395 に顕著な通り、底辺の拡大化に伴い底辺も内弯化が進み、底辺の弯曲と口縁部の弯曲が恰も瓢の如く二段重ねのように「口縁底辺内弯形態」となる作法である。

以上の F 11 住床直に顕現する変化は、「プロト山田湾式」で認識された【「逆三角形有段丸底坏」出現課題】からは明らかに逸脱した形態であり、敢えて言えば「弯曲逆台形化形態」に代表される新たな有段丸底坏の時代が始動した、とさえ思わせる変化である。

更に変遷は続き、この F 11 住床直出土の瓢のような「口縁底辺内弯形態」に従う有段丸底形態に対し、底辺から口縁部までを瓢のように二段ではなく、一体化しつつも内弯・内傾化を見せる「内傾逆台形化形態」となる変化が生じる。その典型例として第 6 図下段に示した F - 6 住居址（F 6 住と略）床直出土の有段丸底坏 381 を挙げるならば、

H 1 1 住床直 → F 1 1 住床直 → F 6 住床直  
 （「口縁部内弯形態」） （「底辺拡大化形態」・「口縁底辺内弯形態」） （「内傾逆台形化形態」）  
 という連続する年代的な変遷が考察される。

そこで再び「単純鋸歯文系列」の伴存を問題にしよう。膳性遺蹟の特性の一つは有文甕が目立つ点であり、最後に残されたのが C 6 住 2 A 出土例である。第 7 図上段に示したカマド出土の「有頸有文甕」134 はこれまでの膳性遺蹟における有文甕と大きく異なる形態を有しており、最も新しい年代に属する形態と考察する。その形態的な特徴は口縁部が口端付近で内傾する作法であり、G 8 住 2 床直や C 3 住 1 床直では外反、N 6 住床直は口端付近で内傾する傾向が見られるが長頸形態となり、134 は頸部として独立した垂直面を作出し、その部位に単純鋸歯文を配置しており、装飾部位については外反する長頸形態ではあるが、晴山 II 遺蹟の「有頸有文甕」に近い形態である。従って、C 6 住 2 A 例は F 1 1 住床直→F 6 住床直のいずれかの階段に伴存すると思われるが、床直出土の有段丸底坏は伴存しないため、甕の形態を比較することで帰属を推察するならば、F 11 住床直は外反甕のみ、F 6 住床直には口端内弯甕 383 が見られており、甕形態の類似性から F 6 住床直の階段に比定したい。

ここで F 6 住床直の有段丸底坏 381 と有段口端内弯甕 383 の組み合わせに注目し、この構成が沢田 I 遺蹟 R A 518 住居址出土の「山田湾 2 式」と極めて類似することから、北上川中流域と陸中・山田湾の年代的交差を「山田湾 2 式」における日常什器の坏と甕の構成に見出したい。しかも「山田湾式」では伴存が確認できない「有頸有文甕」が、膳性遺蹟において「単純鋸歯文系列」として明らかとなり、「山田湾 3 式」における「有頸有文甕」出現背景へと接近が図られたのである。

さて、膳性遺蹟の学史的な特徴である「単純鋸歯文系列」は、有段丸底坏を中心とした型式学により、その出現から終末までの年代が上記したように「住居址シケス」として導出された。そこで 7 世紀以降の膳性遺蹟における有文甕の隆盛に焦点を当て、連続的な「住居址シケス」の各階段に対して「膳性 1 式」～「膳性 6 式」と命名するならば、

「膳性 1 式」→「膳性 2 式」→「膳性 3 式」→「膳性 4 式」→「膳性 5 式」→「膳性 6 式」  
 （G 8 住 2 床直）（C 3 住 1 床直）（I 9 住床直）（H 11 住床直）（F 11 住床直）（F 6 住床直）  
 となる変遷が措定され、更に「山田湾式」との関係についても上記した型式学的な手掛かりから、

【膳性シケス】		【出現期の山田湾シケス】
「膳性 1 式」	↔	(+)
「膳性 2 式」	↔	(+)
「膳性 3 式」	↔	「プロト山田湾式」?
「膳性 4 式」	↔	「プロト山田湾式」(晴山 II)

「膳性5式」	↔	「山田湾1式」
「膳性6式」	↔	「山田湾2式」

となる「土器型式」間の年代別地方別対応関係が導出される。

また、「膳性1式」から「膳性6式」まで見られた「単純鋸歯文系列」はその後如何なる変化を示すのであろうか。ここで改めて「山田湾3式」の現象に注目したいと思う。「山田湾3式」の沢田I遺蹟RA 534住居址では「格子目文系列」の「有頸有文甕」が伴存し、それに「横線文帶有文甕」が伴存する。同様に房の沢IV遺蹟RT 04古墳では「複合鋸歯文系列」への変化が認知されるなど、「山田湾3式」は有文甕の発達にも大きな特徴がある。

この「山田湾3式」の型式学的位相は幸いにも北上川中流域の学史的な古館II遺蹟（光井文行ほか1986）で追認することができる。第7図下段は古館II遺蹟D 07住居址（D 07住と略）床面出土土器群であるが、97が「格子目文系列」の内湾する口縁部の「有頸有文甕」である。口縁付近の横線も「横線文帶有文甕」の影響と思われる、「山田湾3式」に観られる作法である。有段丸底坏93と有段丸底高杯95の底辺扁平化も「山田湾3式」と共通する作法である。

とすれば、「山田湾式」にみられる変遷画期の1つである「山田湾3式」は、有文甕においては南部の膳性遺蹟を中心とした影響から、古館II遺蹟などを中心とした中部の系統へ、という転換を意味している可能性が高い。それはより広い意味では「単純鋸歯文系列」から「格子目文系列」への大きな文様転換でもあり、「山田湾式」における「住居址シケス」や「墳墓シケス」だけでは明らかにできなかった、

「単純鋸歯文系列」の継承	「膳性6式」	↔	「山田湾2式」
「格子目文系列」の発達	（古館II D 07住）	↔	「山田湾3式」

という広域に顕現する共通の現象として判明した意義は大きい。

このように北上川中流域の「住居址シケス」に接近することにより、「プロト山田湾式」における5つの課題の中、【「底辺縮小有段丸底扁平坏」出現課題】と【小型盤出現課題】、及び【口頸部単純鋸歯文小型甕出現課題】については概ね解明の方向で方針が確立したように思う。

残された【「逆三角形有段丸底坏」出現課題】と【長頸長胴甕出現課題】は北上川中流域方面の「住居址シケス」にも多少示唆を受けるが、深耕に向けての吟味は不十分に思える。

#### 4. 八戸方面への接近と「墳墓シケス」から観た「山田湾式」

「山田湾1式」が沢田I遺蹟RA 520住居址と房の沢IV遺蹟RT 05古墳において「東北北部型坏」（利部修1993、仲田茂司1997）と密接な関係にある「有溝丸底坏」を伴存する現象は、明らかに「膳性シケス」とは異なる動向であり、同時に残された二つの【「逆三角形有段丸底坏」出現課題】と【長頸長胴甕出現課題】に対する解明の方向性も示唆する。

第2図の「プロト山田湾式」に戻るならば、小型の「長頸長胴甕」である房の沢IV遺蹟の275及び晴山II遺蹟の10・12は岩手県中部の一般的な形態（八木光則2007）ではないものの、「山田湾1式」の「有溝丸底坏」とともにその出現由来追及には資料の蓄積と研究が進んでいる八戸方面が参照枠となる。

その前に「山田湾文化」とより直接的な地理的關係にある北上川上流の「長頸長胴甕」を確認しよう。第8図1は盛岡市上田蝦夷森古墳群第1号墳主体部出土の「長頸長胴甕」である（室野秀文ほか1997）。ミガキ作法に先行してハケメ作法が施される点は晴山II遺蹟も共通し、祖形として位置付けられるであろう。とすれば、北上川上流域から遠野方面へ、そして遠野方面から山田湾へ、という【長頸長胴甕出現課題】に対する光明が見えてくる。

## 1) 八戸方面への接近—【長頸長胴甕出現課題】への対応は「日常什器揃え」から—

要となる北上川上流域への展開についてはやはり馬淵川が重要な役割を果たし、下流域である八戸方面「前一段階」の田向冷水遺蹟に注目すれば、既に「長胴甕Aは頸部に弱い段が形成され、口縁部は直上気味に立ち上がった後、外反し、端部は角状である。体部～口縁部がヘラミガキされており、全体的な器形、調整技法は北大式土器と類似している。北海道との影響のなかで成立したものと考えられ、(中略)袋状ピットを備えた続縄文系土壙墓出土のヘラミガキ調整の甕からの系譜が辿れる。」(宇部則保 2007a)と独特の形態と調整作法に対する来歴解説が与えられ、更に北方へと問題が展開する興味深い現象に関心が赴くことになる。

第8図2～13は田向冷水遺蹟における住居址別同一層位出土土器群(小保内裕之ほか 2006)から「長頸長胴甕」形態の参画状況を抽出したものである。第8図2はS K 65の2層出土の大型「長頸長胴甕」で、3の坏が伴存する。底部の作りなど上田蝦夷森古墳群第1号墳と共通するが、口縁部の円形刺突文など年代的系統的に異なる施文が見られることから、2を直接の祖形とすることはできない。より古い年代の「長頸長胴甕」であり、坏3の伴存が矛盾しないとすれば、北上川下流域における類似の坏(佐藤敏幸 2007)から6世紀前半に接点を有する。この円形刺突文の系譜と思われる作法はS I 47の1層出土である第8図4の小型「長頸長胴甕」にも見られる。同じ層からは第8図5・6が伴存することから、同様に北上川下流域系譜の坏(佐藤敏幸 2007)と理解でき、より新しく6世紀後半に接点を有する。

S K 65出土例→S I 47出土例は共にミガキ作法が徹底しているものの、円形刺突文の関与が認められ、上田蝦夷森古墳群第1号墳の祖形とするよりも寧ろ年代的に古式の別形態と考えたい。しかも重要なことは6世紀には円形刺突文関与の特徴ある展開が長期にわたり見られるということで、そこに「前一段階」(宇部則保 2007a)の意義と年代的な課題も見出す。因みにS I 47の1層出土例と類似の坏が出土するS I 1の1層からは爪形文施文の甕の破片もあり、その系統性も興味深い。

こうして円形刺突文の関与が見られない「プロト山田湾式」の【長頸長胴甕出現課題】が、八戸方面における新たな問題として浮上するが、まずは「前一段階」を長期に構成する田向冷水遺蹟で、「前一段階」の伝統から新たな「長頸長胴甕」へと如何にして現象化されるかを検討しなければならない。

第8図7・8はS I 38の1層出土土器である。有段丸底坏8は一見すると「膳性2式」に類似する形態が見られるが、1層出土の他例には外反形態の有段丸底坏などもあり、より古式の「膳性1式」期前後の年代と考察する。7が大型に属す「長頸長胴甕」であり、口縁部に円形刺突文などの施文は見られない。「膳性2式」にはハケメ作法の小型「長頸長胴甕」が伴存しており、7の胴上部がミガキ作法に先行してハケメ作法が認められることも含め、「膳性1式」期がどうやら北上川上・中流域における【長頸長胴甕出現課題】にとり重要な転換期と位置付けられそうである。故に上田蝦夷森古墳群第1号墳主体部出土例も年代的には「膳性1式」期頃と考えられる。

第8図9・10はS I 32の2層出土土器である。有段丸底坏10はS I 38出土杯と大分異なり、年代の隔たりが認められるが、生憎とその中間の年代には「長頸長胴甕」の伴存が未明である。具体的に坏10を型式学的に考察するならば、第2図下段の晴山II遺蹟例に強い形態的類似が指摘できる。坏10と伴存する小型の「長頸長胴甕」もミガキ作法で晴山II遺蹟例と類似することから、S I 32の2層は「プロト山田湾式」でも晴山II遺蹟出土例と年代的な対応が可能であろう。

こうして「山田湾文化」における【長頸長胴甕出現課題】は故地の中核に八戸方面の動向が措定され、円形刺突文などの施文が消失する年代である「膳性1式」期には北上川上流へと強い影響を及ぼし、更に「山田湾文化」にも「プロト山田湾式」として出現したと考察する。

因みに前稿では年代的系統的に敏感でその出現背景について北向きの問題として直接の対象としたのは「山田湾1式」の「有溝丸底坏」で、特に房の沢IV遺蹟RT 05墳における伴存する坏2種

構成の一方を代表していることから、阿光坊古墳群など墳墓関係における共通性に注目した。田向冷水遺蹟の住居址ではどうであろうか、触れておきたい。

第8図11～13はS I 43の2層出土土器である。「有溝丸底坏」の11は内湾度が低く、本来の「有溝丸底坏」形態とは異なる。それは沢田 I 遺蹟 R A 520 住居址例や房の沢 IV 遺蹟 R T 05 墳例との比較で十分に理解されるが、11の特徴を一言で云えば「有段丸底坏」の口縁部に横線を1条施文する作法であることから「有段有溝丸底坏」と呼びたい。次に11の形態を有段丸底坏として比較すれば、ミガキ作法とハケメ作法の違いは系統差として「山田湾1式」と接点を有することから、「山田湾1式」期に比定できる「有段有溝丸底坏」であろう。この「有段有溝丸底坏」と同様な作法は岩手県中部にも見られる（集落遺跡検討会編2004、八木光則2007）ことから、「山田湾2式」の沢田 I 遺蹟 R A 518 住居址に伴存する「有段有溝丸底坏」例は杯の形態が「山田湾2式」の典型であるが、そこに八戸方面の影響で1条の横線が施文された可能性が高く、11を母体とする動向が彷彿とする。第8図12・13の長胴甕がハケメ作法である点にも八戸方面と北上川上・中流域との関係が示唆される（集落遺跡検討会編2004）。

こうして田向冷水遺蹟からは【長頸長胴甕出現課題】への接近のみならず、「山田湾1式」と関係が深い「有溝丸底坏」や「有段有溝丸底坏」への見通しも得られたが、それらの杯形態の類似には臆気ながら【「逆三角形有段丸底坏」出現課題】も横たわっているように思える。

## 2) 「山田湾1式」から見た八戸方面における「墳墓シケス」の交替劇—【阿光坊シケス】から【丹後平シケス】へ—

「プロト山田湾式」の房の沢 IV 遺蹟遺構外出土坏から始まる【「逆三角形有段丸底坏」出現課題】は、「山田湾1式」にも影響を及ぼし、房の沢 IV 遺蹟 R T 05 の「有溝丸底坏」もそうした課題と決して無関係ではない。そこで「逆三角形有段丸底坏」と「有溝丸底坏」が房の沢 IV 遺蹟の古代墳墓と強い関係にあることから、八戸方面を参照枠（宇部則保1989・2002・2007 a・b・2013）としつつも、特に古代墳墓出土土師器杯に年代学的変遷の焦点を当て、山田湾の在り方と比較・検討してみたい。

「プロト山田湾式」である晴山 II 遺蹟と接点を有しながらも推移の中心をより古式とする「墳墓シケス」が形成される青森県おいらせ町阿光坊古墳群（小谷地肇編2007）の墳墓出土土器が第9図上段1～7である。著名な古代墳墓であることと、土器の分類は報告書に詳しいことから、年代の基準となる有段丸底坏、及び晴山 II 遺蹟と関係する碗を見ておきたい。

A 11号墳出土の有段丸底坏1は北上川中流域の「膳性1式」と形態が共通するもミガキ作法が異なり、本稿で「阿光坊1期」と呼ぶならば、有段部が強く意識され底部が独立する形状から、明らかに「逆三角形有段丸底坏」より古式に位置付けられる。「阿光坊1期」に伴存する碗が内湾の強い2であり、有段の作法である。有段部の強調が緩和され口縁部と底部が一体化した有段丸底3はA 9号墳出土であり、やや内傾するなど1から変遷した「阿光坊2期」に相応しい坏であり、ここから「逆三角形有段丸底坏」として外形が弧線を描く伝統が形成される。「阿光坊1期」に伴存する碗4も有段丸底坏と同様に有段部が緩和される。

念のために「逆三角形有段丸底坏」と定義した外形特徴を一言で云えば、口端を内傾・内弯とし口縁部全体を弧状に大きく描き、底部を小さくする形態に尽きる。阿光坊古墳群では「阿光坊2期」以降は底部を縮小化する有段丸底坏が二三見られるが、そのような場合は口縁幅が広くなり頭でっからのアンバランスとなる印象を与えるためか、幅広口縁部に1条の横線を施文する変化が現れる。A 10号墳出土の有段丸底坏5はやや扁平ながらも「逆三角形有段丸底坏」を維持し、3の作法の有段部を2段作出する作法が見られ、3からの変遷と措定されることから「阿光坊3期」と呼ぶ。「阿光坊3期」に伴存する碗が6である。この「阿光坊3期」には底部を縮小化した有段丸底坏も混在する可能性が高い。

「逆三角形有段丸底坏」の最後はA 2号墳出土の「有溝丸底坏」7である。5よりも内弯気味な作法で「逆三角形有段丸底坏」を維持し、有段部に2条横線を施文する作法が「阿光坊4期」としての特徴となる。7が祖形となり、房の沢IV遺蹟RT05の「有溝丸底坏」が出現するのであろう。有段丸底坏として見るならば、外形的に晴山II遺蹟例(第2図26)と共通するであろう。「阿光坊4期」には椀が伴存しないが、ここに晴山II遺蹟の椀(第2図27)が同期する可能性が高い。

以上の「墳墓シケス」を纏めるならば、

【阿光坊シケス】：「阿光坊1期」→「阿光坊2期」→「阿光坊3期」→「阿光坊4期」  
(A 11号墳) (A 9号墳) (A 10号墳) (A 2号墳)

と変遷し、「阿光坊4期」に後続する形態は田向冷水遺蹟SI 43の2層出土の「有段有溝丸底坏」と考察するとともに「山田湾1式」の「有溝丸底坏」も同年代と措定する。

【阿光坊シケス】は「山田湾1式」の直前である「プロト山田湾式」、とりわけ晴山II遺蹟の階段までミガキ作法による有段丸底坏の継続性ある変化を確認したが、ナデ+ハケメ作法やナデ+ケズリ作法が主流となる「山田湾1式」の出現に注目するならば、「山田湾1式」と接点を有する八戸方面の古代墳墓の様相には如何なる変化を見出せるのであろうか。

「山田湾1式」を社会変動の画期とみる前稿の型式学的立論を本稿でも堅持するが、地域を異にしつつも共通の問題意識を有し、しかも地域研究面から詳細な接近を図る宇部則保の業績(宇部則保1989・2002・2007 a・b・2013)は大いに参考になる。本稿で注目すべき最新の議論は古代墳墓の一括性も射程に入れた「古代馬淵川流域周辺の土器様相」(宇部則保2013)における「3期」の議論であり、具体的に「坏は底部にハケメ、ヘラケズリ、口縁部にヨコナデが増え、長胴甕は体部にハケメ(中略)、ヘラケズリ(中略)が増加し、1・2期に多用されたヘラミガキが少なくなる。調整の違いも2期と3期との大きな違いである。八戸市丹後平古墳(中略)に供献されている土師器杯には、在地(中略)、陸奥中部(中略)、折衷(中略)の三様の地域性が見出せる。」(宇部則保2013:ゴチック体は引用者)と展開された型式学に着目する必要がある。

そこで早速、第9図下段の丹後平古墳(宇部則保ほか1991、渡則子ほか2002)出土土器群に接近する。「山田湾1式」と外形の共通する有段丸底坏は口縁部がヨコナデ、底部がヘラケズリの「A類」でも「A I類」と報告された1(1号墳)と2(21号墳)で、本稿では「丹後平1期」と呼ぶ。【阿光坊シケス】からの変遷が辿れず、しかも「山田湾1式」との型式学的関係も強く、「陸奥中部」に由来する。

この「丹後平1期」と「阿光坊4期」との繋がり無く、特に調整作法に断絶が見られ、と同時に丹後平古墳群では【阿光坊シケス】の「阿光坊3期」から「阿光坊4期」と類似した有段丸底坏が見られない点からも、「丹後平1期」にはそれ以前の伝統的な調整作法を超えた変化、即ち、異系統的な貫入現象が措定される。それはまた「山田湾1式」の出現と同期した広域に関係する社会的な動向でもある。

但し、この違いを年代的と考えずに【阿光坊シケス】を丹後平古墳群の地域差とする見方に対しては、丹後平43号墳(渡則子ほか2002)では「阿光坊1期」に遡るとされる有段丸底坏が出土し、隣り合う地域で型式学的に同期した現象が確認されることから、年代差と考察する。

「丹後平1期」からの変遷を導出する。「山田湾1式」から「山田湾2式」への変化は伝統性と継承性を重んじる変化様態であったが、「丹後平1期」の次はどうであろうか。「A I類」が系統的に変遷する形態は口縁部が拡張する作法に従う「A IIb類」において他に無いであろう。10号墳では3~6の4点が「A IIb類」の纏まりとして伴存し、それにミガキ作法の7を伴存させる現象が見られることから、これらを「丹後平2期」と呼ぶ。7は「有溝丸底坏」の作法に近く、「山田湾2式」において有段部直上に偶然に施文されたような有溝施文が関係するかもしれない。この「丹後平2期」は「A IIb類」を主体とし、客体的にミガキ作法が伴存するが、前者を以て「山田湾2式」に並行



した。

その結果、北上川中流域の「住居址シケス」からも、そして八戸方面の「墳墓シケス」からも、【山田湾シケス】の出現過程や「プロト山田湾式」について相互に関係する現象を見出すことに成功し、それらを地域別年代順序として纏めるならば、【表1】となる。

【膳性シケス】	【山田湾シケス（前半）】	【阿光坊シケス】 / 【丹後平シケス】
「膳性1式」	↔ (+)	↔ 「阿光坊1期」
「膳性2式」	↔ (+)	↔ 「阿光坊2期」
「膳性3式」	↔ 「プロト山田湾式」?	↔ 「阿光坊3期」
「膳性4式」	↔ 「プロト山田湾式」(晴山II)	↔ 「阿光坊4期」
「膳性5式」	↔ 「山田湾1式」	↔ 「丹後平1期」
「膳性6式」	↔ 「山田湾2式」	↔ 「丹後平2期」
	「山田湾3式」	↔ 「丹後平3期」
	「山田湾4式」	↔ 「丹後平4期」

表1 「山田湾式」の出現と周辺地域との関係

ここで結語として【表1】の意義について纏めるならば、型式学の対象として重要なのは前稿を補訂すべく見出した「プロト山田湾式」、及びそこから導出した5つの課題への対応方法である。

まず、【膳性シケス】の構築は、課題5の【口頸部単純鋸歯文小型甕出現課題】を追及する中で甕を扱う必要性から「日常什器揃え」による「住居址シケス」に結びつき、前稿でも触れたが「鋸歯文系列」には北向きの導動性が微弱であることを改めて確認した。それは「墳墓シケス」の構築でも明確で、房の沢IV遺蹟古代墳墓RT04の出土例は【阿光坊シケス】や【丹後平シケス】には見られない現象でもあり、确实性が増幅するであろう。

同様に課題2の【底辺縮小有段丸底扁平坏】出現課題と課題3の【小型盤出現課題】も、類例の動向や【阿光坊シケス】における否定的な在り方からは決して北向き現象ではないとの判断から、【膳性シケス】を媒介とした南向きの北上川下流域との連絡・交渉が射程に入るが、山田湾周辺では日常什器として風習化しない。

【口頸部単純鋸歯文小型甕出現課題】は【膳性シケス】という参照枠により「プロト山田湾式」への入植年代に見通しが得られたが、甕という器種にはもう一つ課題4の【長頸長胴甕出現課題】が待ち受けていた。「長頸長胴甕」が南向きでは無く北向きであろうことは【膳性シケス】から予察されるが、八戸方面に構成される「墳墓シケス」から「プロト山田湾式」との関係を見出すには至らず、そこで田向冷水遺蹟において有段丸底坏及び大型小型を問わず「長頸長胴甕」の両器種を伴存する住居址内同一層位出土事例を検討すると、決して主体を占めないものの6世紀以来伴存する伝統が浮上した。

幸い、6世紀由来には円形刺突文が施文されることから、北上川上流の上田蝦夷森古墳群第1号墳出土例は7世紀前半に編年的位置を、そして「プロト山田湾式」に比定される例も導出されたが、連続した「住居址シケス」の構築は今後の課題である。唯、重要な点は「山田湾文化」における「長頸長胴甕」の受容が晴山II遺蹟の「プロト山田湾式」までであり、「山田湾式」には伴存しないという事実である。

こうした動向は課題1の【逆三角形有段丸底坏】出現課題と密接な関係を有し、【阿光坊シケス】が構成されるが、「山田湾式」の出現前夜までの出来事であり、【阿光坊シケス】から【丹後平シケス】への転換劇こそが、山田湾においても八戸方面においても8世紀の社会変動の一環として南向き系統の席卷という集団入植をもたらした共通の現象と考察する。

畢竟、「山田湾式」の出現には古代蝦夷史上の大きな画期が潜んでおり、それを三陸沿岸地方で順序立てて読み解くには集落の構成や動態に加えて古代墳墓の復元にも迫らなければならないであろう。

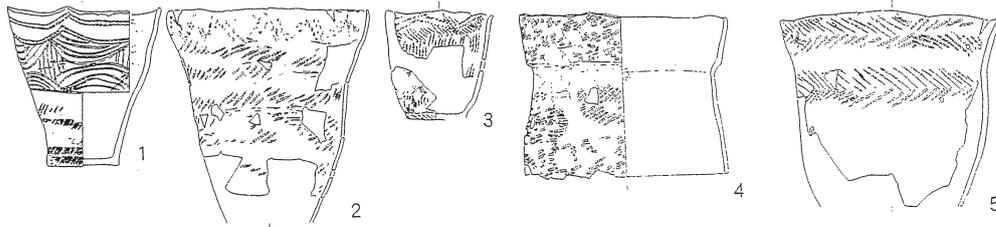
最後に。「山田湾文化」の位相を「列島境界形成史」として考察すべく研究を開始して丸3年が過ぎた。陸中海岸に山田湾を擁する岩手県下閉伊郡山田町の復興は、特に船越半島低地で被災し、仮設住宅での生活を余儀なくされている方々にとっては厳しく、人生設計が未だ見えないのが現状と拝察している。山田町の未来のために経済効果以外で考古学訪問者にできることは、誇り高き住民の足跡を歴史として残す努力であり、「山田湾文化」が少しでも明らかになり、世界に繋がる太平洋の自然環境に恵まれたコミュニティの存立意義とは何か、を学び伝えることである。学びの原点となった川端弘行氏（山田史談会会長）の導きと川向聖子氏（山田町教育委員会／山田史談会事務局）のご援助に心から感謝します。

また、古代土器の研究には齋藤弘道氏（牛久市文化財保護審議会委員／馬場小室山遺跡に学ぶ市民フォーラム）から大局的なご教示を、資料の実査では渡則子氏（八戸市博物館）と船場昌子氏（是川縄文館）からご配慮を賜り、関係文献の調査では齋藤瑞穂氏（新潟大学／山田湾まるごとスクール事務局）と五十嵐聡江氏（葛飾区郷土と天文の博物館／山田湾まるごとスクール事務局）にご援助頂きました。本稿で大いに活用した近年の文献については辻秀人氏（東北学院大学）と宇部則保氏（是川縄文館）からご高配に与りました。末尾ながら深甚なる謝意を表します。

## 引用・参考文献

- 相原康二ほか 1981)『岩手県文化財調査報告書第60集 東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書X I』岩手県教育委員会・日本道路公団
- 五十嵐聡江 2014)「房の沢古墳群の編年から古墳群の展開を探る」『山田湾まるごとスクールのしおり』山田湾まるごとスクール事務局・新潟大学災害・復興科学研究所危機管理・災害復興分野
- 岩手県教育委員会事務局文化課編 1996)『岩手県文化財調査報告第98集 岩手県内遺跡発掘調査報告書(平成7年度)』岩手県教育委員会
- 宇部則保 1989)「青森県における7・8世紀の土師器一馬淵川下流域を中心として」『北海道考古学』第25輯 北海道考古学会
- 宇部則保 2002)「東北北部型土師器にみる地域性」『一市川金丸先生古稀記念記念献呈論文集—海と考古学とロマン』市川金丸先生古稀を祝う会
- 宇部則保 2007a)「第11章 ix 青森県南部～岩手県北部」『平成15年度～平成18年度科学研究費補助金助成(基盤研究B)研究成果報告書 古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』東北学院大学文学部
- 宇部則保 2007b)「古代東北北部社会の地域間交流」『古代蝦夷からアイヌへ』吉川弘文館
- 宇部則保 2013)「古代馬淵川流域周辺の土器様相」『研究紀要』第2号 八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館
- 宇部則保ほか 1991)『八戸市埋蔵文化財調査報告書第44集 八戸新都市区域埋蔵文化財発掘調査報告書X 丹後平古墳』青森県八戸市教育委員会
- 大道篤史・佐藤良和・星雅之・佐々木清文 1998)『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 第287集 房の沢IV遺跡発掘調査報告書 三陸自動車道(山田道路)関連遺跡発掘調査』(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 小保内裕之ほか 2006)『八戸市埋蔵文化財調査報告書第113集 田向冷水遺跡II 一田向土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書2—』青森県八戸市教育委員会
- 利部修 1993)「下藤根遺跡出土土師器の再検討—東北北部における位置付けを中心に—」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第8号 秋田県埋蔵文化財センター
- 小谷地肇編 2007)『おいらせ町埋蔵文化財調査報告書第1集 阿光坊古墳群発掘調査報告書』おいらせ町教育委員会
- 齋藤瑞穂 2007)「赤穴式対向連弧文土器考」『信濃』第59巻第2号 信濃史学会
- 齋藤瑞穂 2011)「十王台式の北漸と赤穴式羽状縄文技法の成立」『東国の地域考古学』六一書房
- 齋藤瑞穂 2013)「山田湾沿岸地域における弥生時代開始期の動向」『実践!パブリック・アーケオロジー—鈴木正博さんと馬場小室山遺跡にどう仲間たち—』馬場小室山遺跡に学ぶ市民フォーラム

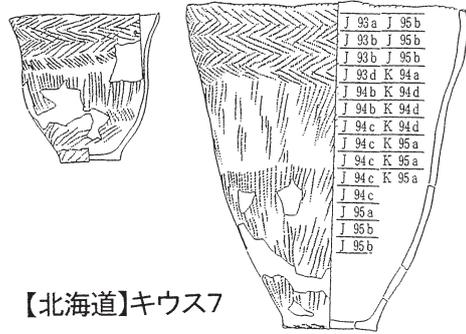
- 齋藤瑞穂 2014「山田湾沿岸地域の弥生土器—弥生三陸地震津波の実態を復元するために—」『山田湾まるごとスクールのしおり』山田湾まるごとスクール事務局・新潟大学災害・復興科学研究所危機管理・災害復興分野
- 佐々木清文ほか 1996『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第249号 山ノ内 II 遺跡発掘調査報告書—三陸縦貫自動車道(山田道路) 関連遺跡発掘調査—』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 佐々木清文 1997『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 第268集 沢田 II 遺跡発掘調査報告書 三陸自動車道(山田道路) 関連遺跡発掘調査』(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 佐々木清文・千葉正彦 2000『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 第318集 沢田 I 遺跡発掘調査報告書 三陸自動車道(山田道路) 関連遺跡発掘調査 第一分冊(一〜三次調査)・第二分冊(四次調査)』(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 佐藤敏幸 2007「第 II 章 vi 宮城県北部・沿岸部」『平成 15 年度〜平成 18 年度科学研究費補助金助成(基盤研究 B) 研究成果報告書 古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』東北学院大学文学部
- 集落遺跡検討会編 2004『岩手県土器器集成(4〜8世紀)』集落遺跡検討会
- 鈴木正博 1976「水戸市南台遺跡の土器器と須恵器」『常総台地』7 常総台地研究会
- 鈴木正博 2002「「十王台式」と「明戸式」—茨城県遺蹟から見た「十王台 1 式」に並行する所謂「天王山式系」土器群—」『婆良岐考古』第 24 号 婆良岐考古同人会、
- 鈴木正博 2013a「陸中・山田湾文化の先史海獣猟」『動物考古学』第 30 号 動物考古学研究会
- 鈴木正博 2013b「三陸・山田湾周辺の自然と先史文化」『野外調査研究所報告 19・20 号合併号』NPO 法人野外調査研究所
- 鈴木正博 2014a「陸中・山田湾文化の八世紀土器に学ぶ—物語的鑑賞という演繹から年代的系統的秩序という帰納への転換を目指して—」『人文社会科学研究所研究プロジェクト報告書 第 276 集 型式論の実践的研究 II』千葉大学大学院人文社会科学研究所
- 鈴木正博 2014b「「防災・減災考古学」から見た船越半島の縄文土器ガイド」・「山田湾に出現した古代蝦夷と貞観三陸地震までの土器器」『山田湾まるごとスクールのしおり』山田湾まるごとスクール事務局・新潟大学災害・復興科学研究所危機管理・災害復興分野
- 鈴木正博 2014c「『常陸国風土記』に学ぶ—先史考古学から見た 8 世紀の霞ヶ浦と浮島の「印象風土論」—」『常総台地』第 17 号 常総台地研究会(印刷中)
- 鈴木正博 2014d「東京低地の「十王台式」から探る 3 世紀の動向—「十王台式」の全方位的拡散と「続十王台式」研究の新たな旅立ち—」『平成 26 年度 地域史フォーラム・地域の歴史を求めて 「古代国家形成期の東京低地—3・4 世紀の東京低地の様相を探る—』葛飾区郷土と天文の博物館
- 高橋千晶 2007「第 II 章 vii 岩手県南部」『平成 15 年度〜平成 18 年度科学研究費補助金助成(基盤研究 B) 研究成果報告書 古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』東北学院大学文学部
- 高橋與右衛門 1994「岩手県の縄文文化と古墳文化」『第 5 回 縄文文化検討会シンポジウム 「北日本縄文文化の実像」』縄文文化検討会
- 高橋與右衛門ほか 1982『岩手県埋蔵文化財調査報告書第 34 集 金ヶ崎バイパス関連遺跡発掘調査報告書(II) 水沢市膳性遺跡』(財)岩手県埋蔵文化財センター
- 仲田茂司 1997「東北・北海道における古墳時代中・後期土器様式の編年」『日本考古学』第 4 号 日本考古学協会
- 平野修 2013「東京都多摩市上っ原くわっばら遺跡(多摩市 No. 1 遺跡)出土の東北系土器について」『東京考古』31 東京考古学談話会
- 星雅之 2000『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 第 342 集 沢田 I 遺跡発掘調査報告書 三陸自動車道(山田道路) 関連遺跡発掘調査(五次調査)』(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 光井文行ほか 1986『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 103 集 古館 II 遺跡発掘調査報告書—東北縦貫自動車道花巻南インターチェンジ 関連遺跡発掘調査—』(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 三辻利一 1997「6 山田町内遺跡出土土器の蛍光 X 線分析」『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 第 268 集 沢田 II 遺跡発掘調査報告書 三陸自動車道(山田道路) 関連遺跡発掘調査』(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 室野秀文ほか 1997『上田蝦夷森古墳群・太田蝦夷森古墳群発掘調査報告書』盛岡市教育委員会
- 八木光則 2007「第 II 章 viii 岩手県中部」『平成 15 年度〜平成 18 年度科学研究費補助金助成(基盤研究 B) 研究成果報告書 古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』東北学院大学文学部
- 渡則子ほか 2002『八戸市埋蔵文化財調査報告書第 93 集 八戸新都心区域内埋蔵文化財発掘調査報告書 XIII 丹後平古墳群 丹後平(1) 遺跡・丹後平古墳』青森県八戸市教育委員会



【北海道】桜町



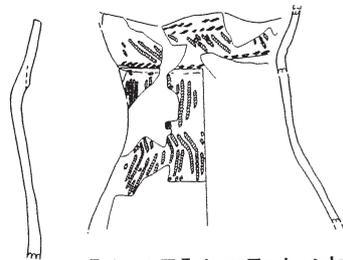
【青森県】九艘泊岩陰



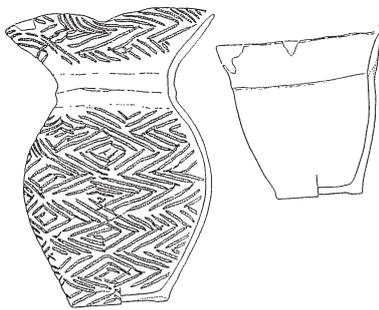
【北海道】キウス7



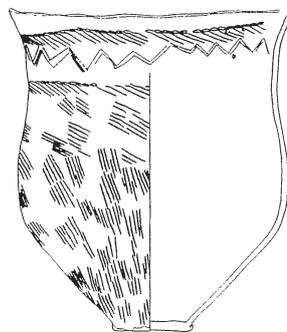
【岩手県】湯舟沢



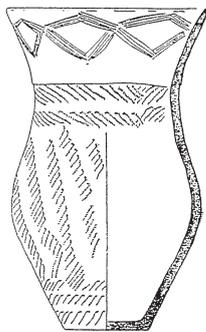
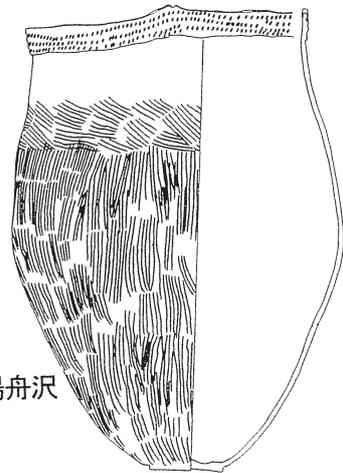
【岩手県】山田町山ノ内II



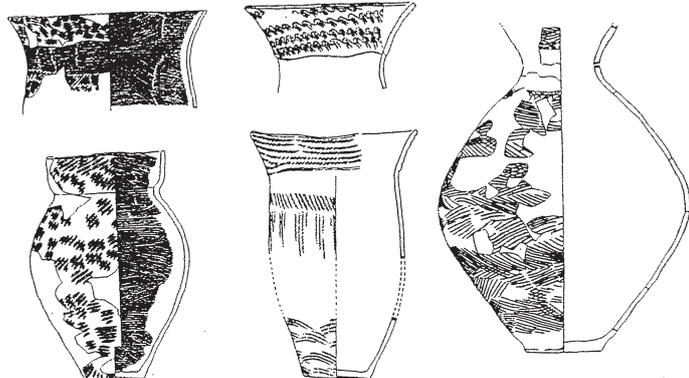
【秋田県】寒川II 2号土壇



【岩手県】湯舟沢

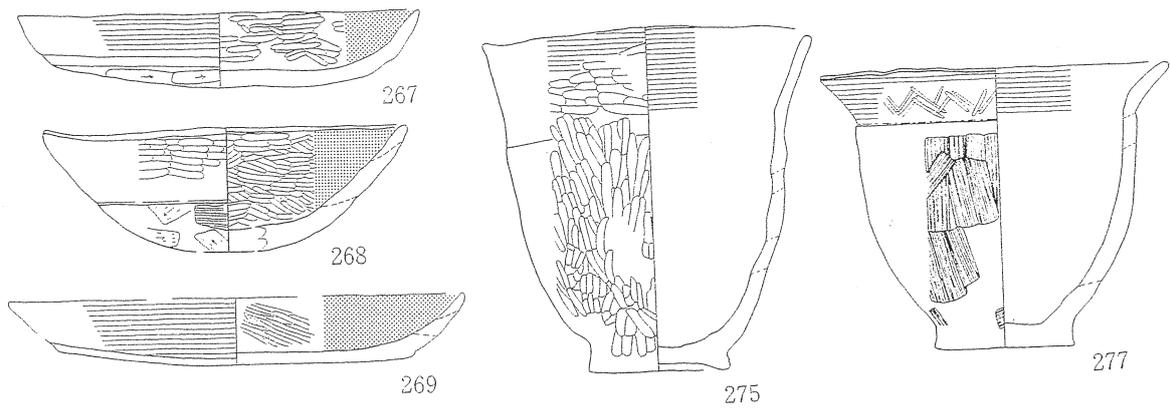


【山形県】石田

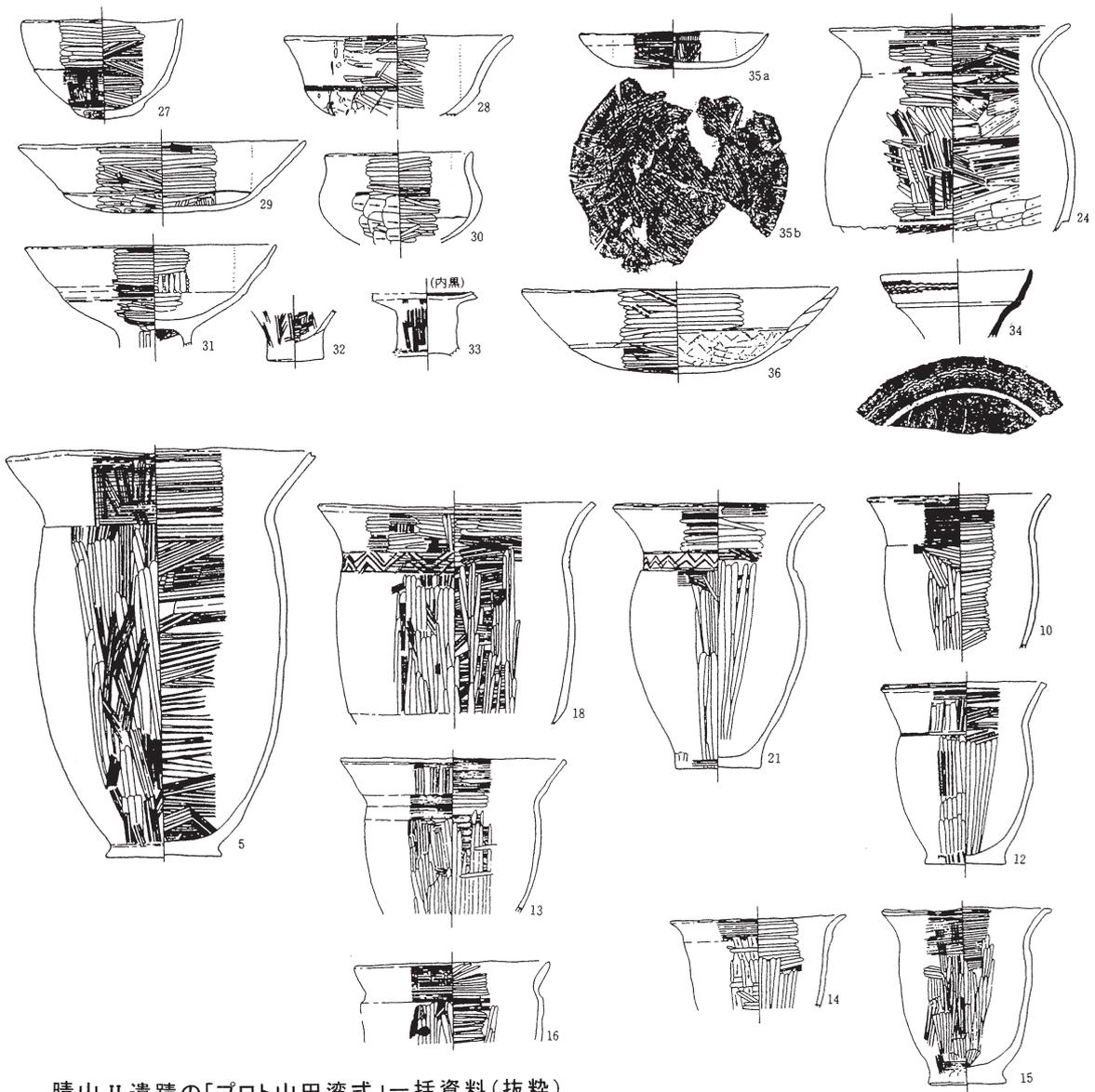


【宮城県】(左列)清水、(中央)五松山洞穴／崎山園洞穴、(右)宇南

第1図 岩手県下閉伊郡山田町山ノ内II遺蹟の後期弥生式土器と「十王台式」関連資料

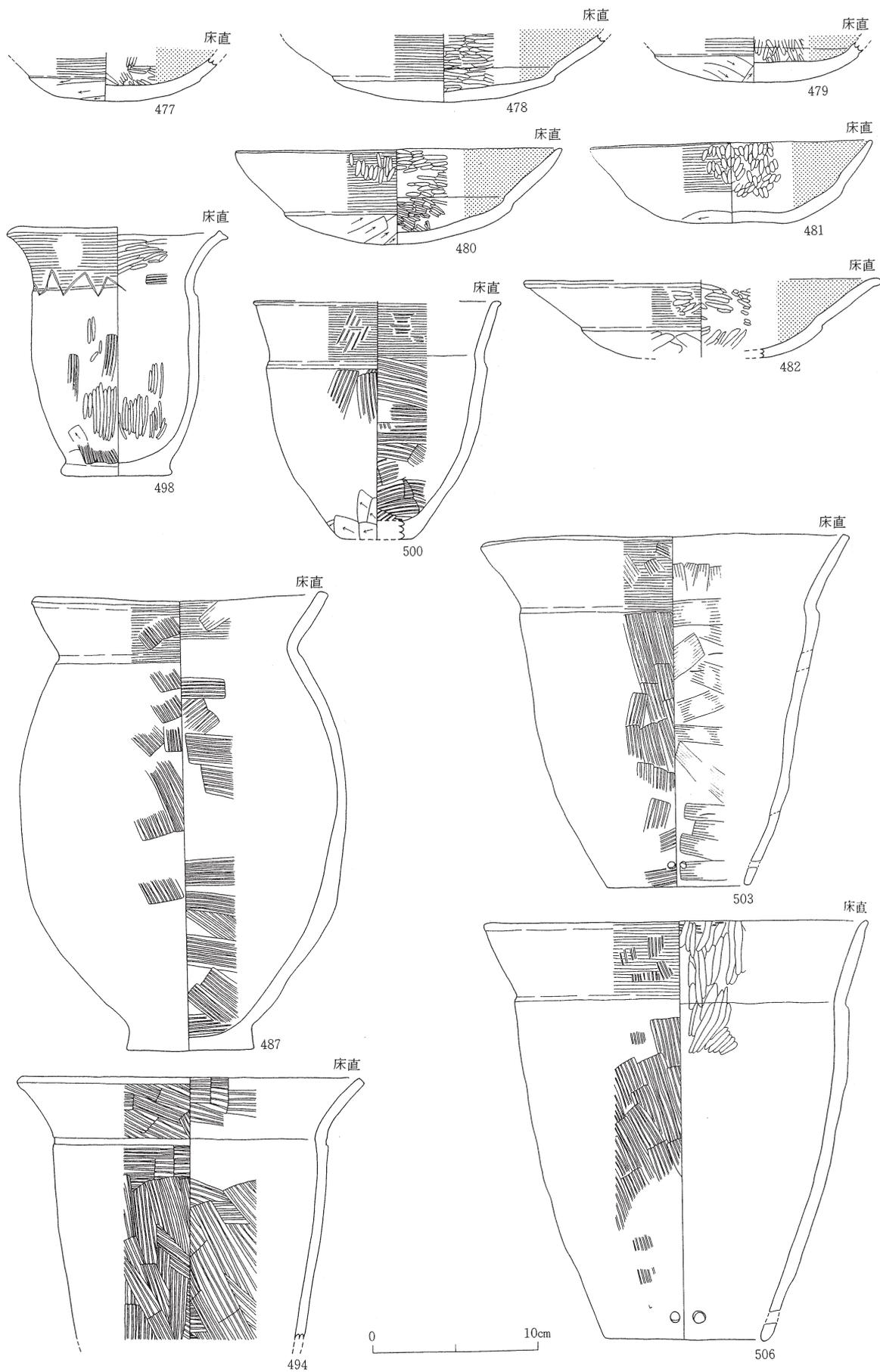


房の沢 IV 遺蹟遺構外出土の「プロト山田湾式」

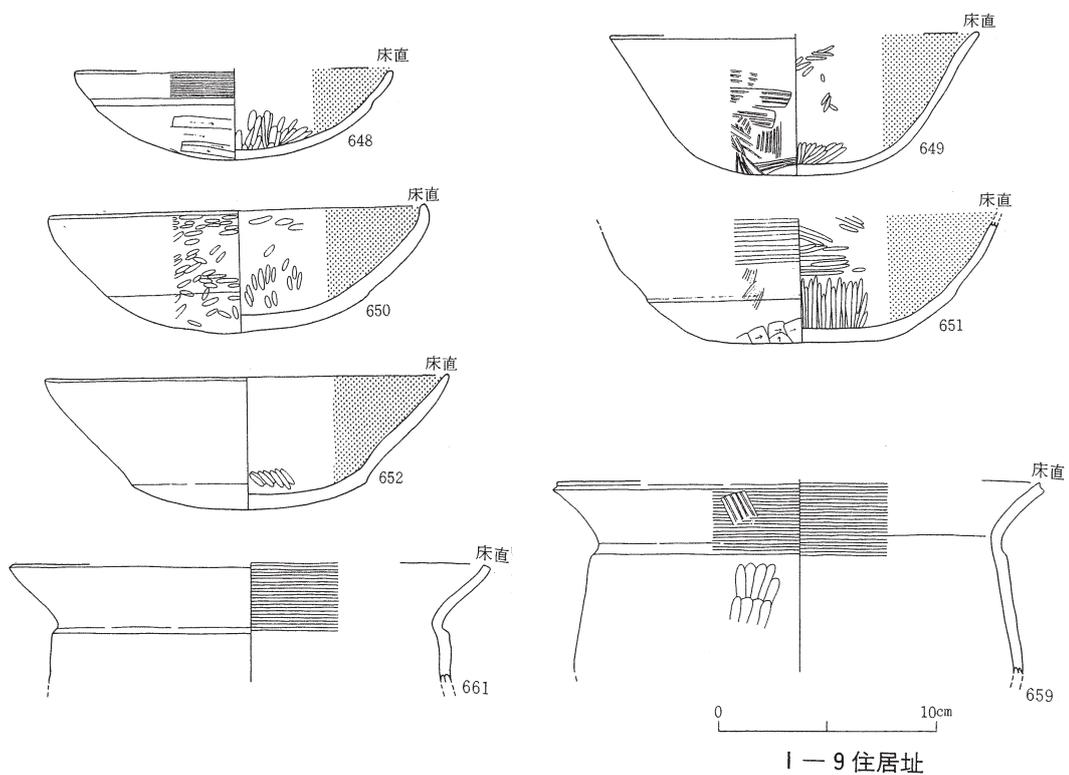
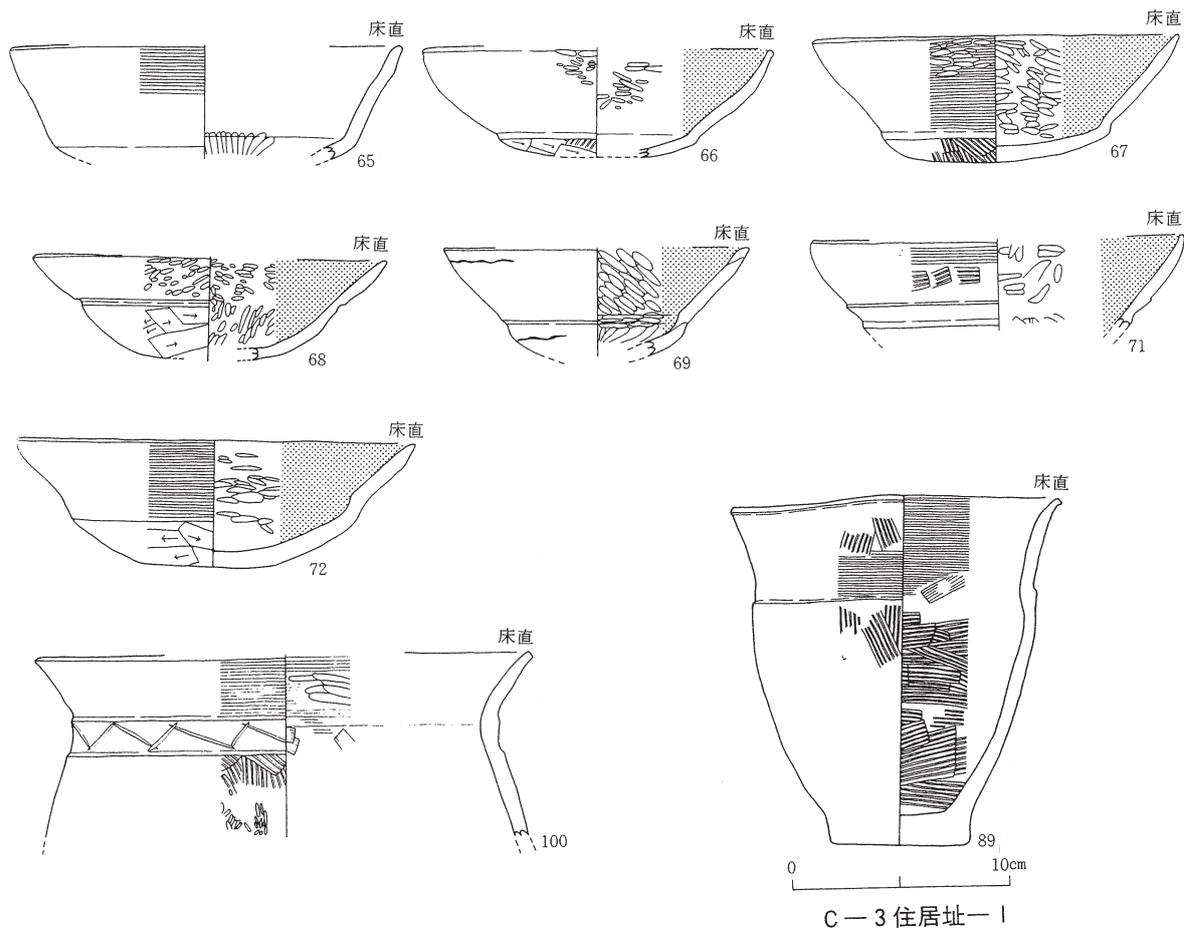


晴山 II 遺蹟の「プロト山田湾式」一括資料(抜粋)

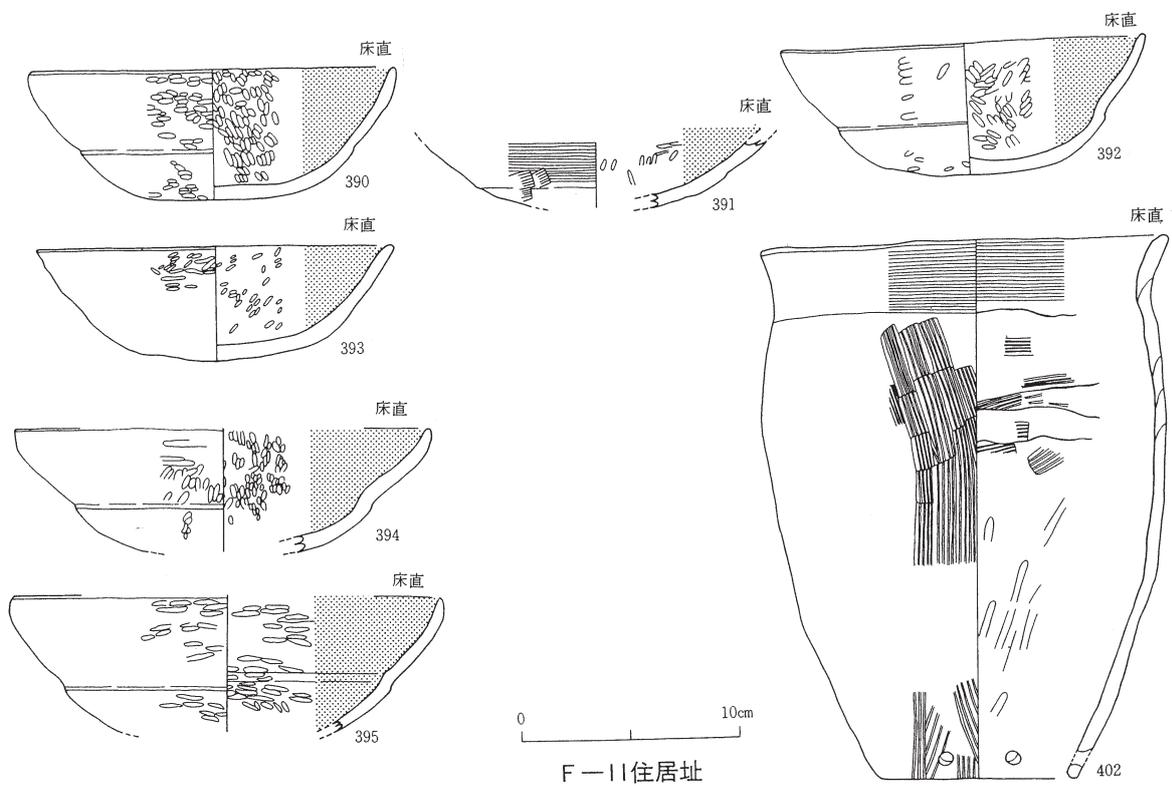
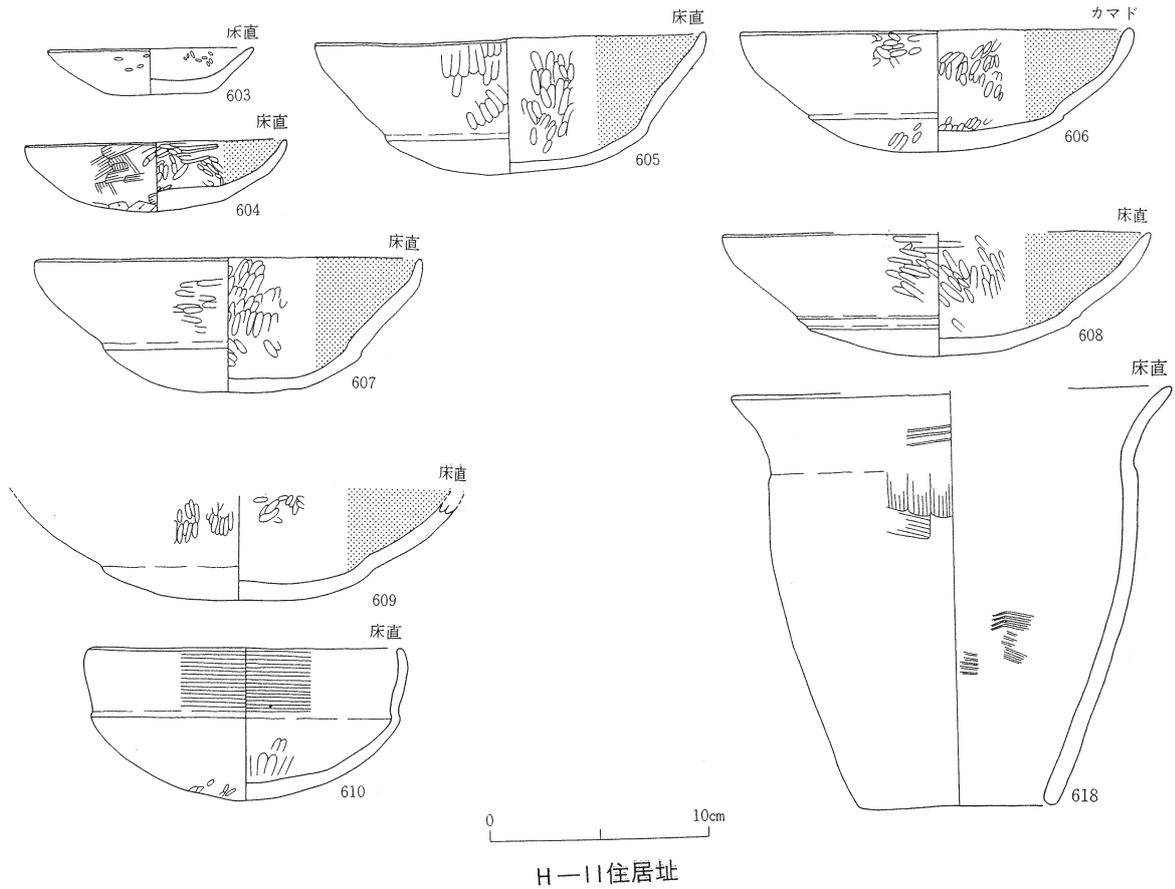
第 2 図 「プロト山田湾式」の抽出と晴山 II 遺蹟の再吟味



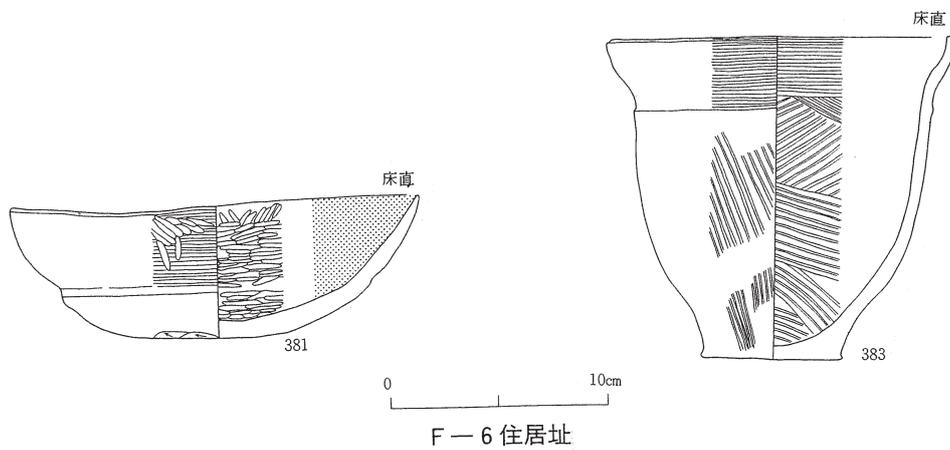
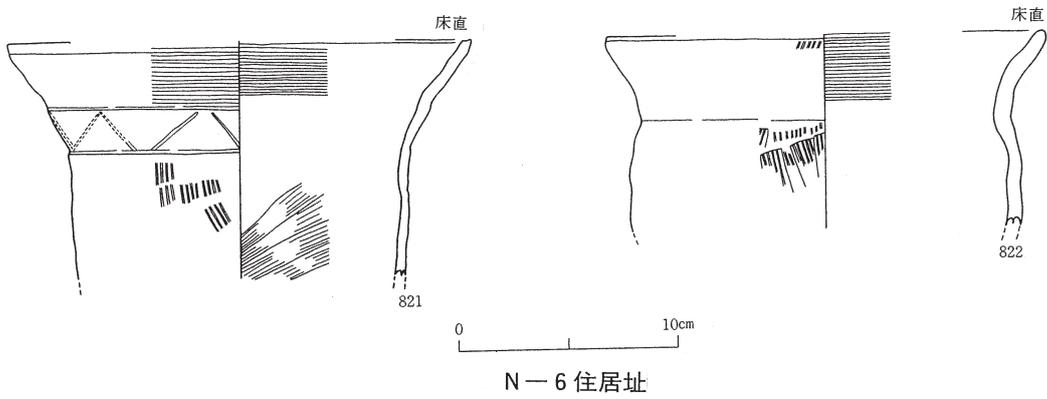
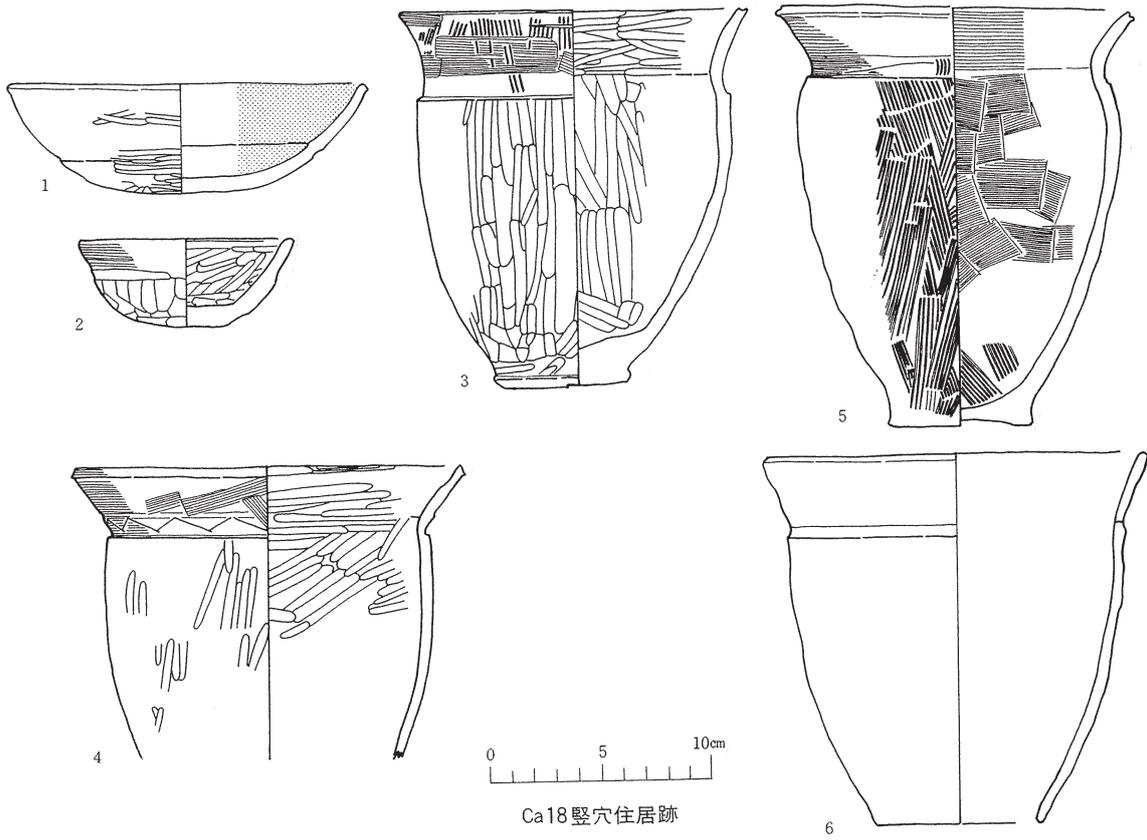
第3図 膳性遺蹟（高橋與右衛門ほか1982）G-8住居址-2床直出土土器



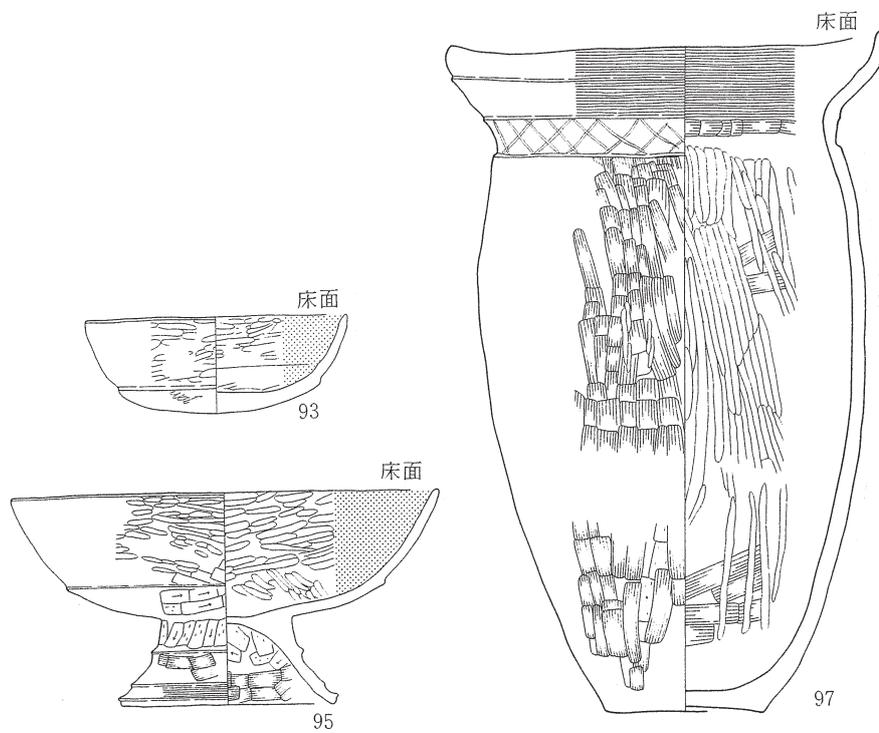
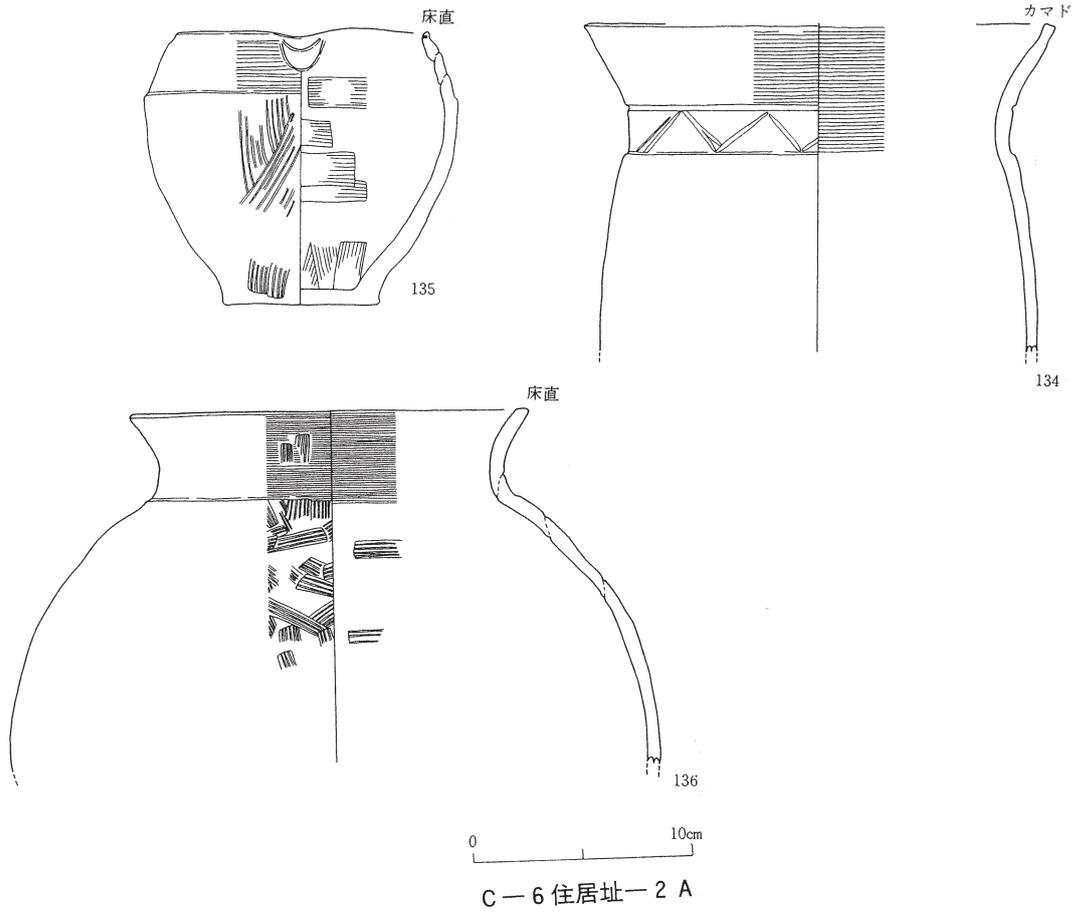
第4図 膳性遺蹟C-3住居址-1 / I-9住居址床直出土土器



第5図 膳性遺蹟H-1住居址/F-11住居址床直出土土器

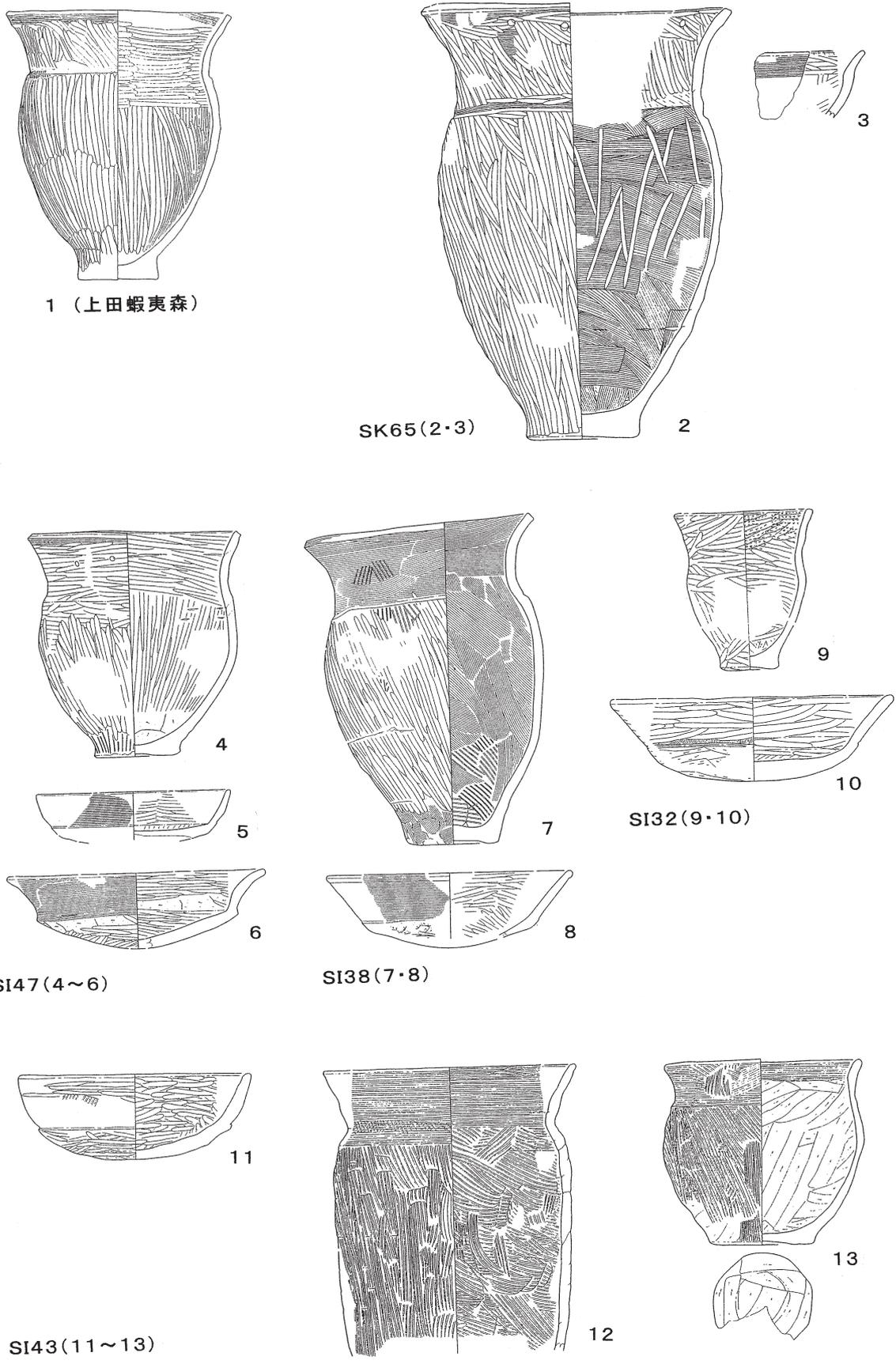


第6図 今泉遺蹟（相原康二ほか1982）Ca18住居址／膳性遺蹟N-6住居址／F-6住居址出土土器



古館 II 遺蹟 D 07 住居址

第 7 図 膳性遺蹟 C-6 住居址-2 A / 古館 II 遺蹟 (光井文行ほか 1986) D 07 住居址床面出土土器



1 (上田蝦夷森)

SK65(2-3)

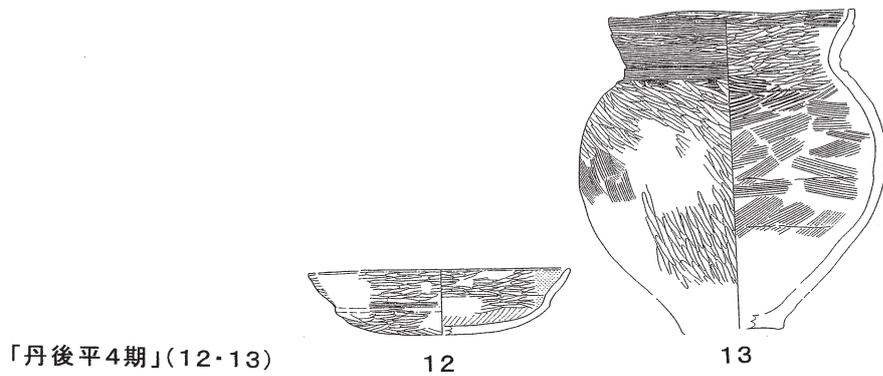
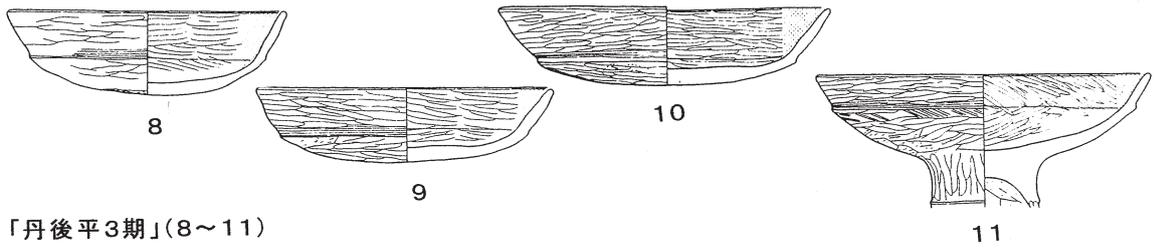
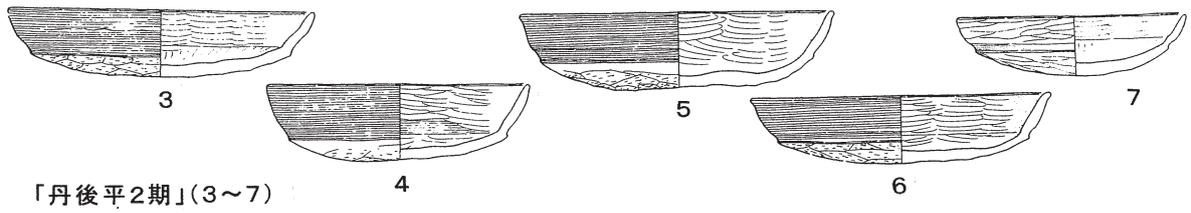
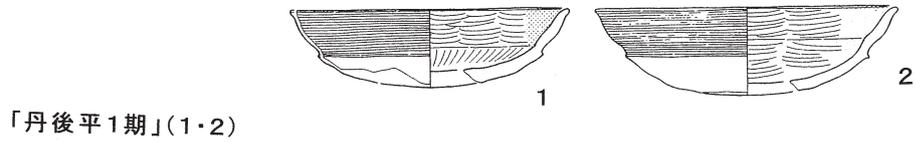
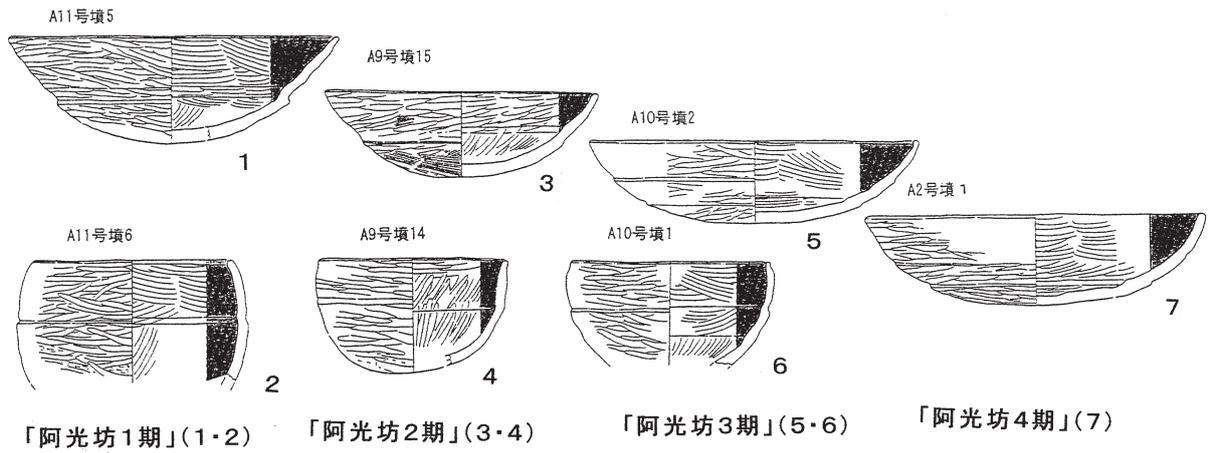
SI47(4~6)

SI38(7-8)

SI32(9-10)

SI43(11~13)

第8図 盛岡市上田蝦夷森古墳群(室野秀文ほか 1997)第1号墳主体部出土土器  
 八戸市田向冷水遺蹟(小保内裕之ほか 2006)住居址出土土器



第9図 阿光坊古墳群 (小谷地肇編 2007) / 丹後平古墳群 (宇部則保ほか 1991 渡則子ほか 2002) 出土土器